

詩・絵本を教材とした高等学校国語教育の意義

「詩と絵本を一体化した「生きる力」を育む教材の開発」

江藤 善健
菅 邦男

1. はじめに

現在、高等学校では「解答がないと勉強できない」と訴える生徒が増え、「解答」の暗記を「勉強」だと信じ切つて他者から与えられた「正解」を「答え」として覚えようとする短絡的な学習姿勢が多くの生徒に染みついていくことに戸惑いを感じている。学習はもちろん「正解」を導き出すことが重要なテーマの一つではあるが、「国語」という教科の特徴は、必ずしもただ一つの「正解」が存在しないということだ。大学入試やセンター試験で高得点を取るために、学校や塾では一つの正解を導く読解法の体得が重視され、実際に複数の答えが予想される問題は悪問とされる。しかし、「正解」が一つであっても簡単に「正解」が導かれる問題が出題される可能性は低く、むしろ「正解」が出るまでには悪戦苦闘し、論理的に思考を展開してようやく自分が「正解」だと思つて解答を導き出す。もちろん導き出した「答え」が「正解」だと自信を持って断言できることはごく稀である。入試の国語問題での「正解」は自分以外の他者の基準で導き出した「正解」ではない。

学校の試験とは異なり、人生において「答え」が事前から決まっています。誰が見ても明確に判断ができることは少ない。「答え」を迫られて判断に迷ったとしても、誰も「正解」を教えるはくれない。そして、どのような「答え」を出してもどこかに矛盾を抱えているのが現実である。「答え」を導き出すのは自分自身である。自分で

出した「答え」の責任から逃避し、他者から与えられた「解答」を「正解」だと信じ込み、自分の生き方にそのままあてはめる、そのような生き方が人生において可能だろうか。自分の生き方は自分で決断しなければならぬ。誰も自分の生き方に悩み、「答え」を求めて生きている。自ら「答え」を出そうと苦しみ、悩み、そのプロセスを乗り越えようとする。その結果育まれた思考力の深まりは人間の生き方へ大きな影響を与えるだろう。人生において「正解」と判断できる確固たる基準は、自分自身の力で生きた人間の成長がもたらす。自分の「答え」を見出すプロセスを「生きる意味」とするならば、国語教育の意義は、自らの力で「想像」「創造」する、つまり人間の「生きる力」を育成することである、といえるだろう。

2. 詩が育む「生きる力」

(1) 学習指導要領に定義された「生きる力」

高等学校学習指導要領改定で、「国語」の教科目標および「国語総合」の目標に「想像力」の表記が追加された。(傍線は筆者)

国語を適切に表現し、的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力(改定後、追加)を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

(新学習指導要領 2009年3月9日 公示)

高等学校教育現場の実態を考慮すると、「想像力」を明記したのは、社会の「想像力の欠如」した状況に危機感を抱き、人間の生きる力の根本を「想像力」と捉え、その育成を目指したためだと予想される。

また、旧学習指導要領（平成十一年三月二十九日告示）と新学習指導要領（平成二十一年三月九日公示）の比較からも「想像力」の育成に主眼が置かれていることがうかがえる。（傍線部は筆者）

第1 国語総合

1 目標

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力（改定後、追加）を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

2 内容

C 読むこと

（1）次の事項について指導する。

ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。

（改定後、追加）

エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。（改定後、追加）

オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、もの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。（改定後、追加）

第2 国語表現

1 目標

国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高

めるとともに、思考力や想像力（改訂後、追加）を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。

第4 現代文B

新学習指導要領により「現代文」が「現代文A」、「現代文B」に改定された。ここでは「現代文B」を比較対象とする。

1 目標

近代以降の様々な文章を的確に理解し、（改定後、追加）適切に表現する能力を高めるとともに、もの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り（改定後、追加）人生を豊かにする態度を育てる。

2 内容

（1）次の事項について指導する。

ウ 文章を読んで批評することを通して、（改定後、追加）人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。

（2）（1）に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。

イ 論理的な文章を読んで、書き手の考えやその展開の仕方などについて意見を書くこと。（改定前）ア 論理的な文章、「イ 文学的な文章」

目標改定の概要は、「国語」の教科目標、「国語総合」「国語表現」

の科目目標において「想像力」の追加表記がなされ、「現代文B」においては「想像力」の追加表記がなされ、「現代文B」には「国語の向上」と「社会生活の充実」が追加表記された。

根拠に基づく論理性を重視した学習内容はこれまでどおりだが、一方的な論拠の押し付けを避け、多様な角度から客観的事実に基づき批評する能力、発信される情報を比較し、情報自体の信憑性を分析、活用する能力など社会生活に即した能力の向上を目指している。具体的活動を例示して「生きる力」の具現化を図る意図が読みとれることも特徴的である。「想像力」は「国語を向上させる」源であり、見えないものを見よとすることは、社会における諸問題や現実をありのままに捉えることでもある。「社会の矛盾を乗り越え、自らの生きる意味を創造する力」と換言してよいのではないが。

(2) 詩の高等学校教材としての意義

これまでの高等学校国語授業において、生徒の想像力育成のために主に教材として扱われてきたのが小説である。今回の学習指導要領の改訂(現代文B「内容」)で具体的言語活動として「論理的な文章」から「文学的な文章」へ優先順位が変更したことから、想像力育成に文学作品を重視する意図が読みとれる。しかし、これまでの小説の授業は、生徒の個人的解釈では全員が一律に「正解」を導き出すことが求められる試験問題の作成上不可能だとして、教師が指導書の「解答」をそのまま唯一の「正解」として説明する傾向が強かった。当然、生徒は独自の解釈では成績に影響するため、教師の示した「正解」を暗記する姿勢に慣れてしまう。特に、入試を控えた時期は教師も生徒も効率的に解答を導き出そうと躍起なり、とにかく「読解の法則」のようなものを求めて必死になる。これでは思考力・想像力どころか、考えようとする姿勢さえ奪ってしまう。

もちろん、小説は現在でも生徒の想像力を刺激し、多様な視点か

ら虚構世界に自己を投影させ、自己形成の舞台としてシュミレーションする可能性を大いに秘めている。しかし、私を含め多くの教師が教科書の指導書に依存し、また自分のこれまでの人生における(生徒時代に自分が受けた授業での体験を含む)固定化した価値観から脱却できず、多様な視点の解釈、新たな価値観の生成が困難な状況にある。文学教材からむしろ道徳的な要素ばかりを摘出し、生徒を指導する手段として用いられてきた現状をもう一度見直す必要があるのではないか。生徒同様に、教師自身にも虚構性における体験に基底した新たな「生きる意味」の創造が必要なのではないか。このような自分の反省に立ち、生徒の幅広い想像力育成につなげるために、同じ文学作品でありながら、小説以上に教師が想像性を生かして新たな解釈を示し、生徒の多様な解釈と交流させて授業展開することができる、しかし授業教材として最も苦手とされる詩に注目した。

詩を創作する意味や詩に臨む姿勢を詩人・黒田三郎は著書で次のように述べた。

詩は作者の想像力の産物ですが、同時に読者の想像力に訴えるものです。よむひとによって、当然そこに違いが出てきます。自分と他人の感じ方の違うことを、そこで学習することも大事です。

(黒田三郎『詩の作り方』1969年 明治書院)

人々が何かの機会ですべて詩を創作する時、または授業の一環で生徒が詩を読む時、詩は作者の感情がそのまま表現されている、詩は自分の感じたことを素直にそのまま言葉にすればよい、と考える。詩を読むことに関して、多くの人は特別な疑問を抱くことはほとんどない。高校生も、短い文章で自分の気持ちを率直に、しかも平易な言葉でわかりやすく表現して、ということに当然のこととして理解

しているだろう。詩の鑑賞を指導する立場にある教師の認識も生徒とほぼ同じだと考えられる。短い時間で朗読して、簡潔に言葉の意味を説明して、生徒に情景をイメージさせて、とりあえず詩の授業は終わらせる、これが現実である。しかし、詩は簡単に遊び感覚で創作できるものなのか、感じたことを正確に言葉に表現することは可能であるのか、仮に言葉で表現できたとしてもそれを「詩」と呼ぶことができるのか、平明な表現で読む人に気持ち伝わるのか。よく考えてみれば、詩をめぐる様々な疑問が浮かび上がる。詩を学習する根底にあるのは、そうした疑問を、生徒が主体的に感覚体験することにある。本来、詩の創作とは人間としての主体的行為による創作である。

生活における言動の矛盾から、詩が生まれがちです。詩人の書く詩は、もちろんそのひとの実生活から生まれたもので、その間には相即の関係があります。しかし、同時に、実生活と詩とは、矛盾するものでもあります。むしろ、矛盾が詩を産むと言ってもいいかもしれません。

（黒田三郎『詩の作り方』前掲）

人間は日常生活においてさまざまな矛盾を感じながら生きてゆく。理想を抱く青年たちにとって社会で直面する矛盾は簡単に乗り越えられるものではなく、無意識に、時には意識的に直視することを回避する場面にしばしば遭遇するであろう。しかし、人間は自我を喪失した時に改めて自分を模索し、これまでと違った新しい「生きる意味」を見出して生きてゆく。自我の解体から新しい自我を再構築して、何度も現実社会の矛盾を乗り越えることが現代では求められている。詩はその一助となる可能性を大いに持ち、また詩の魅力でもある。

文芸学者・西郷竹彦氏は、詩における虚構の世界を「現実をふま

え、現実をこえた世界」と定義し、理想的見地や未来視点から「現実を逆照射すること」で「日常的な意味を超えて、深い思想的な意味を生み出す」ことだと述べている。つまり「虚構」としての詩は現実における「日常性をするべく深く意味づける役割」であり、「現実批判、文明批評、あるいは自己批判の機能」を担うのである（西郷竹彦・文芸教育全集9『文芸の世界 近現代詩』1996・10 恒文社 / 西郷竹彦・文芸教育全集18『文芸学講座 虚構・美・真実』1997 恒文社）。

詩の「意味」は作品の中にパッケージされて、読者が受けとってくれるのを待っているといったものではなく、読者は自分の感受性を全開にして、作品と いう場へ乗り込み、そこに「意味」を生み出すという 労を払わなければ何一つはじまらないのだ。

入沢康夫『詩にかかわる』(2002.6 思潮社)

詩人・入沢康夫は、同著で「詩は、本質的には、自我の確立に『力を貸してくれる』ようなものではなく、むしろその解体の方向へ矢印の先を向けている」と述べた。詩は表現が平明で短い文章だが、読者の主体性が求められる。「自我の確立に『力を貸してくれる』ことを期待しながら読んでいては詩を読む意味と同時に詩の存在価値までも喪失してしまう。詩の鑑賞は、読み手の多様な解釈が可能であるからこそ、これまでの古い自我の解体に向けて、主体性を発揮させる機能を持つ。そこに詩を鑑賞する目的と意義がある。

詩の読解を通して現実を認識、思考し、自らの意志で「生きる意味」をこれまで以上に深く掘り下げることを学ぶ。「正解の暗記」という一義的な認識でしか学ぶことができない現在の高校生には、想像力の育成につながる国語教材としての詩の価値を教師が見直し、詩の読解に数多く挑戦させる機会を設定する必要がある。高校生が

大人になり、詩を創作する機会はなくても、詩を読む機会や詩を読みたい衝動に駆られる時が今後必ず訪れる。

(3) 詩における想像力の効果

(ア) 比喩 〱類似性の発見と創造〱

戦後に荒地派の詩人として活躍した田村隆一の詩集『四千の日と夜』(1963 東京創元社) から一編の詩を挙げる。田村は、戦争による文明の破壊と世界の荒廃したイメージを直喩に仮託して詩を創作した。

田村隆一 詩集『四千の日と夜』(前掲) より

遠い国

ぼくの苦しみは

単純なものだ

遠い国からきた動物を飼うように

べつに工夫がいるわけじゃない

ぼくの詩は

単純なものだ

遠い国からきた手紙を読むように

べつに涙がいるわけじゃない

ぼくの歎びや悲しみは

もつと単純なものだ

遠い国からきた人を殺すように

べつに言葉がいるわけじゃない

比喩は読者に感性的に対象をイメージさせ、また新たなイメージを創造させる働きを持つ。佐藤信夫は著書『レトリック感覚』(講談社学術文庫 1982) で類似性を設定する比喩について、読者には「どれほど、似ているか 同一性に近づいているか」というぐあいに考えるくせがある」と指摘し、比喩における類似性とは「どれほど、似ていないか 相違性に近づいているか」ということでもある」と述べている。

田村隆一は、比喩で虚構世界をイメージさせ、人間の生きる真実を逆説的表現で詩に描こうとした。「ぼくの苦しみ」詩「歎びや悲しみ」は「遠い国」に存在するので、それらはすべて自己とかけ離れているのだから、深く考える必要もなく「単純なものだ」と語っているが、「単純なものだ」と思いたい語り手の心情の複雑さからかえって言葉を失うという矛盾を表現している。詩の虚構性において描いた自己内面が自己とは無縁の「遠い国」「外的世界」に存在する人間の姿を描く。また、語り手は自分の喜びや悲しみを「単純なものだ」としながら、異国の人間を殺すことに類似性を見出し、決して言葉で表現できない「単純」ではない悲愴的な感情を比喩に込めて表現していることに気が付くだろう。読者に言葉の両義性を暗に意識させて、逆説的に人間が生きることの真理を鋭く突いてくる。

田村の詩における比喩の効果を考えて、「もともとと比較されるような類似性が期待されていないところに予想外の類似性を見いだす認識」(佐藤信夫) が詩の特徴だといえることができる。詩の読解には、虚構で描く世界において言葉の類似性を発見したり説明したりする作業を伴う。読者に対し言語間に断絶した類似性を直感や感性で、つまり読み手の想像力や思考力で埋めてゆくことが重要になってくるのである。

(イ) 日常語の異化 〈言語感覚の再認識〉
大正から昭和にかけて新興芸術派の作家として文壇に登場した梶井基次郎は、処女作『檸檬』(1925) 初出・同人雑誌『青空』を
発表した。この作品の内容を詩にしたものが日記に残されている。

秘やかな楽しみ

一顆の檸檬を買ひ来て、
そを玩ぶ男あり、
電車の中にはマントの上に、
道行く時は手拭の間に、
そを見、そを嗅げば、
嬉しさに充つ、
悲しくも友に離れて、
ひとり 唯独り我が立つは丸善の洋書棚の前、
セザンヌはなく、レンブラントはもち去られ、
マチヌ 心をよるこはさず、
独り 唯ひとり 心に浮かぶ楽しみ、
秘やかにレモンを探り、
色のよき木を積み重ね、
ひとり 唯ひとり 数歩へだたり、
それを眺む 美しきかな
丸善のほこりの中に、一顆のレモンを澄みわたる、
ほほえまひて またそれをとる、冷さは熱ある手に快く、
その匂ひはやめる胸にしみ入る、
奇しきことぞ 丸善の棚に澄むレモン
企みてその前を去り
ほほえみて それを見ず、

(1922.6 / 所収 『檸檬』 1931.5 武蔵野書院)

小説「檸檬」は、得体の知れない不吉な塊に心を押さえつけられ
苦悩する「私」が、レモンの色彩美と芳香・感触に感動し、ひとり
妄想を楽しむという物語である。小説を詩に置換する手法は、中学
校の国語の授業で写真や絵の感想を歌に読んだり詩作したりする学
習と似ている。物語の展開を事前に理解して詩を鑑賞すると、詩の
短い表現一つ一つの言葉に無駄がないことに気付き、それぞれの言
葉に意味を感じることが出来る。日常の言葉を文学表現の言葉へ
と転換させて、対象を情報として受け流すのではなく存在そのもの
を自己に意識化させる。物語と詩を相対させて言葉の持つ異質性や
同義性などを理解し、普段は無意識な日常語を意識的に異化させる
ことが新しい言語感覚を磨くことにつながる。詩を鑑賞する際、物
語を読む時以上に異化された言葉を意識し、想像力を働かせること
で能動的に読もうとする態度が育つ。文学作品を鑑賞するも一つ
の意義であり、読解の基礎としても重要だ。

外国の文学作品を日本語に翻訳して日本の作品として描く時のよ
うに、翻訳者(＝読者)が言語表現に限らず文学作品の語り手や登
場人物の関係を異化し、テクストの背後に隠されたコンテクストや
相互関係を認識して、作品と完全に同化して想像性に乏しい画一的
な解釈に陥ってしまうことのないよう特に留意しなければならない。
子どもが時として大人の想像を超越した解釈を生み出すのは、対象
に同化せず常に異化する作業の中で生きているからである。

3. 絵本が育む「生きる力」

(1) 義務教育の「生きる力」、高等学校の「生きる力」

唯一の「正解」だけに依存する高校生の生き方を見直すためには、
これまでの学習姿勢を見直し、高等学校で求められる「生きる力」
を再構築する必要があると前章で述べた。それでは高等学校での学
習に、義務教育課程からどのような発展が望まれているのか。義務

教育（小、中学校）と高等学校の目標を比較する。（傍線部は筆者）

小学校

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

中学校

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

高等学校

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

義務教育課程を経て高等学校教育課程で目指されるべき能力は、次の四点に要約される。

思考力や想像力の伸張。

心情的豊かさの醸成

磨かれた言語感覚の成熟

言語文化への理解と向上

高等学校は「心情を豊かにし」という表記がある。「豊かな心情」という定義が曖昧でわかりづらいが、二つの側面から捉えた。一つ

は、自己において社会で直面する矛盾から改めて自分を模索し、これまでとは違った新しい「生きる意味」を見出そうとする心。もう一つは、他者において言葉を通じて個人ではできない体験をし、自分自身の体験として知ることのギャップを埋めようとする心である。また、高等学校には「言語文化」という表記があることから、日本語という「言語」に対する認識に関連する文化的社会的背景・思想などを多様な価値観に基づく多角的視点で分析や認識する能力が求められる。

しかし、義務教育課程から発展が望まれた思考力や想像力・心情的豊かさ・言語感覚などが現代の高校生に十分に育っているとは言いがたい。思考力のある生徒は、言葉遣いや表記など言語に対して敏感で、丁寧に言葉で思考を構築し、その過程で自然と言葉の微妙な変化やニュアンスに適切に反応する言語感覚を育んでいるようだ。つまり言語への関心は、思考力や想像力の礎として生きることに於いて当然必要とされる。しかし、言語への関心や好奇心など主体的態度の育成は看過され、前述した通り「正解の暗記」に主眼を置く学習姿勢が原因の一つとなつて、発展的な「生きる力」の伸長を指した義務教育課程での実践が高等学校で生かされていない実態を裏付けている。高等学校の国語でも暗記重視の傾向は年々顕著になり、むしろ想像性が欠落し、「生きる力」の伸長を阻んでいる。

高校生に「生きる力」＝理想的見地や未来視点から「日常的な意味を超えて、深い思想的な意味を生み出す」「日常性をするべく深く意味づける役割」「現実批判、文明批評、あるいは自己批判の機能」（西郷竹彦 前掲）を植え付けるためには、もう一度原点に戻り、義務教育課程で扱われた文学教材で学ぶことが必要ではないかと考えた。社会的視点で現実を捉えた高校生の読解に対応できるテーマを扱い、幅広い解釈可能な要素を持つ作品、主体的な読解のために相当の想像力が要求されつつ、しかもできるだけシンプルな表現

な文学教材。そのようなニーズに応える最適な教材として考えたのが絵本である。

(2) 絵本が描く世界

大人になるにつれて、児童文学や絵本を非現実を描写した観念的な世界として捉える傾向がある。動物との触れあいや子供同士のファンタジーに彩られた稚拙な文章というイメージを大半の大人が持っていることも事実である。

児童文学者・横谷輝によれば、小川未明や鈴木三重吉が活躍した大正時代の日本近代童話は「思想の詩」「童話詩」「詩的象徴童話」と呼ばれ、詩的要素を内に含んでいた。そして日本の「詩」は、短歌・俳句・近代詩（近代詩）など詩創作の大衆化が進み、また、日本の近代童話は、現実との格闘から離れた形骸化、美化、希薄化した趣味としての修辭的な「詩的な」ものが氾濫した状況にあった。絵本は児童の叙情的感性の醸成のために利用され、児童を社会現実を構成する要素としてではなく、純粹さという普遍的価値を有する存在にすることを目的としてきた、と横谷氏は指摘している（『児童文学の思想と方法』1999、啓隆閣出版）。現代において、詩が創作される環境や絵本事情は大正時代と異なるが、児童文学や絵本が「児童の叙情的感性の醸成のために利用」されていることは当時とほぼ同じであろうと推測される。

一般的に大人の価値基準に照らし合わせ、大人がこどものためによいと判断したものを与えた童話を「児童文学」と規定しているようである。大人は、児童文学に対し、象徴的・観念的に描写して心情・感性に訴えかけた物語を展開する手法を軸としている印象を持っている。また、小説をリアリズムや論理・理性による創造体として児童文学よりも優位な存在として認識する傾向にもあった。しかし、本来児童文学、特に絵本は「童心」という抽象的概念と同等の存在

として捉えるべきものではなく、社会現実と密接に結びつき、社会展望の視点に立つて創造されるものである。

心理学者河合隼雄は著書『神話の心理学』（2006、大和書房）で次のように述べている。

生きるための深い知恵を学ぶ材料として、「神話」がある、と私は思っている。「神話」などという古くさい、それにわけのわからぬお話がどうして現代に役に立つのだろうか。それは、人間存在の最も根源的なことにかかわることが、神話に語られているからである。

（中略）

原理や原則では言い切れない、逆説に満ちた真実を表現するには、「物語」という形はぴったりである。そして数ある物語のなかでも、「神話」は人間や世界の成立に立ち返ってまでの語りであるために、学ぶことが実にたくさんある。

児童文学者・今江祥智氏は児童文学には「大人と子どもを『対』のものとして、お互いを一人の人間として捉えようとする作家の視座」が必要であるとして、子どもの眼を通じた日常生活を描くことで現実起きた事件を実感的に見せることができる可能性を見出した。「大人の視座（ともすれば、現在の知った者の目で書いてしまつ）を防ぐ」ことが本当の意味で真実を表現できると述べている（『今江祥智の本 第22巻』1981、理論社）。児童文学や絵本を「生きる」という人間の根源的意味を追求する媒体としての価値を大人が見出せば、それらは子どもの「生きる力」を更に引き出す要素となりうる。

(3) 絵本の国語教材としての意義

絵本の魅力は、物質的・功利的価値観の現実世界に生きる人間が、

その対極に位置する虚構の世界に真実を見出すことができる点にある。子どもから大人へ成長する過程において生じる様々な矛盾から、現実世界へのストレスや恐怖・不安が一層虚構の世界へ傾倒してゆく一つの要因としても考えられる。絵本の帯には、大人が購入することを意識してか、「癒し」「自分らしさ」といった表現が多いことから、現代人が絵本に何を求めているのかわかることが出来るよう。

絵本を読み、自らの生きる意味を模索しようとする大人が増える一方で、河合隼雄は、現代人の多くは「物語」の読解が苦手でマニユアル通りにすれば望ましい成果が出るという合理主義中心の短絡的思考が強いことを指摘している。

マニユアルを読むのにその人の人間性や人格は不要で、知的理解だけで十分である。そのような態度で神話を読んでも何も理解できない。人間は物でもないし機械でもない。そのことを忘れて、「ハウ・ツー」式の書物を求め、それによって生きようとしても、結果的にうまくいかない場合が多いのではなからうか。

これに対して、「物語」は読むのに人間全体の力が必要。したがって、神話の読み解きは、ひとによってそれぞれ異なる、と言ってもいいだろう。

河合隼雄『神話の心理学』（前掲）

ギリシャ神話やグリム童話など、外国語を日本語に翻訳して出版された優れた絵本や児童文学が子どもたちの成長に大きく寄与していることにも注目したい。翻訳という作業は、翻訳者の揺るぎない主体的な言語認識が重要となる。まず翻訳者が外国語を解釈する知的水準が高くなければならない。外国語の文化的コンテキストやニュアンスを、母国語としての人々以上に意識化して言語を対象化する能力が求められる。次に、外国語における異言語圏の文化的背景

を把握して、母国語との文化的差異を埋める作業が必要となる。両言語それぞれの文化的主体を重視し、異文化の相互理解を前提としながらも、自国語の文化的コンテキストやニュアンスに配慮した言語表現を実現しなければならない。日本の優れた翻訳者の存在が、言語表現を通じて異国語・異文化の交流を可能にし、また自国語・自文化を再認識することで多くの日本人の新しい自己主体性を確立させた。

人間は古来から神話や物語といった虚構世界を体験することで現実世界を変える力を得てきた。同様に、現代でも一般的には幼児向けとされる絵本が大人の心をいつまでもとらえて離さず、心に深く刻み込まれ、現実を生きる知恵や支えとなっている。子どもだけでなく大人も想像力を豊かにして鑑賞すれば、絵本は新しい世界観を創造する媒体となる。絵本や詩を通じた感性的体験が人生に大きな力となって蓄えられ、神話を失った今の時代に人間が豊かに生きる力を再発見させるだろう。

作家・柳田邦男は著書『砂漠で見つけた二冊の絵本』（岩波書店2004年）で、「人は人生において三度、絵本や物語を読み直すべき」と述べた。自分が子どもの時、自分が子どもを育てる時、そして人生の後半になった時を指し、特に大人になって自分の生き方に結びつけて読解することを覚えた時に絵本の素晴らしさを実感したと回想している。また、人生で最も苦悩した時期に絵本に救われたと述べていることも興味深い。絵本や児童文学における童話の世界は人間の初期成長過程において必要とされてきた。これまで多くの絵本や児童文学の物語が「人間とは何か」という根源に関わる問いにヒントを与え、子どもの成長に大きく影響することが証明されているからである。特に絵本の読み聞かせは現在も重要な幼児教育の実践の一つとして評価されている。幼少の頃に最初に絵本と出会い、意味もわからずただ絵だけを見入っていた時期を経て、生徒がまさに

「生きる意味」を模索している時期だからこそ、絵本が高校国語教育の教材として価値がある、といえるのではないか。

4. 詩と絵本を一体化した教材開発

(1) 詩と絵本の共通性 ～生きる意味の翻訳～

小学校で主に扱われる児童文学と、幼児の読み聞かせとして扱われる絵本。どちらも子どもの充実した感性のための情操教育の一環として評価されている。児童文学は言葉による虚構体験のため語彙の差（知識の差）でイメージや理解度に差が生じるが、絵本は絵による虚構体験であり言葉だけではイメージできない対象を描くためより想像性と主体性が求められる。高校生が文章だけの児童文学を鑑賞したとしたり、文章表現に関する知識や技術の体得を意図する合理的目的だけの学習に終始したり、現実世界におけるこれまでの体験を通じた視点に偏って、純粹に主体性を発揮した読解が難しくなったりすることが考えられる。しかし、絵本は一ページの絵に作家が色彩・構図・一本の線に至るまで文章では語り尽くせない膨大なメッセージを込める。徹底した観察眼が要求され、経験の浅い子どもが自分の持つ最大限の想像を駆使して絵本と向かい合うように、虚構世界でスムーズにしかも主体的に疑似体験することが可能になる。小・中学校は思考力・想像力・言語感覚の「涵養」が主な目的であるが、高等学校はそれらの「伸長」や「成熟」が目的とされている。高校生が義務教育課程の文学教材、特に絵と言葉が一体化した絵本一枚の絵を何度も繰り返し観察し、言葉にできない強烈なイメージや真実を新しい視点で捉える。簡潔で平明な表現の裏側にある空間を社会的展望に沿った自分自身の多様な解釈で埋めてゆく。絵本を高校教材として発展させて使用することは、受け身で眺めるだけでは見えてこない現実を自らが主体的に捉えさせ、生徒の想像力や思考力の定着と伸長を測るバロメーターにもなる。

また、児童文学者・横谷輝は、児童文学作品に関し人間の暗い（醜い）部分を大人は客観的・郷愁的に受け止めるが、児童は現実に捉え嫌悪感を抱く、つまり児童にとつて人間の暗部は乗り越えなければならぬ対象であり回帰するものではない、と分析した（『児童文学の思想と方法』前掲）。具体的には人間の死や社会の矛盾を指すと考えられる。もちろん子どもは夢や希望を持って未来への時間的感覚を生きてゆくことが望ましく、現実だけを直視して生きてゆくことを強いることは出来ない。人生経験も乏しく、受容することが困難な現実も当然存在する。しかし、児童文学と同様に絵本も未来への時間的感性だけを描写するのではなく人間を総体的に描いている。絵本は人間の死や矛盾を乗り越えることを虚構世界で体感し、現実世界で生きる力に変える媒体でもある。子どもが成長する過程において、現実社会に生きるためには自己内面と対峙し自己を確立してゆかなければならない。絵本であっても理想的に展開する必然性はなく、むしろ矛盾をいかに生きるかというテーマで展開する絵本が子どもには必要だ。総体的時間の流れ（生死）に即した人間社会の現実を描く絵本には詩的な表現が数多く存在する。絵本は、「子どもの目」・「子どもの認識」・「子どもの倫理」で適切な対象が表現されているが、それらは「大人の目」「大人の認識」「大人倫理」が「子ども」と判断した認識に基づいている。子どもは成長し、人間が生きる外的世界の矛盾を超越しようと苦悩し、自己の内的世界を見つめる必要に迫られる。

自己を直視し、現実に向き合おうとする姿勢が芽生えたその時に詩は生まれると黒田三郎はいう。絵本には大人が見ても残酷、非情がリアルに感じる描写がある。詩人が詩を作ることと同様に、自己の内面世界に反映している現実を、詩的表現によっていかに虚構の中に構成するか、という点で絵本作家・児童作家も物語を創作する苦悩を抱いているのではないか。絵本を子どもが「おもしろい」と

思うことだけに意味を見出し情緒的安定をもたらすことに利用するだけではなく、創作者の絵本へ込める子どもたちへの思いを知り、詩を読むように「自分の感受性を全開にして、作品という場へ乗り込み、そこに『意味』を生み出すという労を払」って絵本を読むことも立派な自己生成へのステップである。

子どもにとって大人の世界は、未知なる異言語・異文化の領域であり、大人の世界観で伝えようとしても全てを認識することは困難である。社会の現実を子どもが理解可能な虚構世界に翻訳し、虚構性を媒体として主体的に生きる意味や人間の真理を認識しやすい状況を整えることが大切である。このことは、異言語・異文化間の差異を補充して文化的融合を図る文学作品の翻訳作業とよく似ている。絵本に数多く詰まっている生きる知恵を子どもたちが自ら引き出す翻訳者としての役割をこれからの国語教育は担っていかなくてはならない。すぐれた翻訳者の存在が、絵本に人間の真理を再現させる原動力となるのである。

時代が移り変わっても、絵本作家は世界中で優れた作品を数多く生み出し、虚構世界で自己実現を可能にする思考や想像を深める機会を与え続ける。現代では子どもだけでなく大人も魅了し、田村隆一や茨木のり子など大人向けの詩創作活動をしてきた詩人による絵本は決して珍しくない。絵本は字をよく読めない子どものための本である、という考え方もはや先入観でしかないことを示した現象でもある。

(2) 詩と絵本の一体化教材 詩

絵の描写において広い視野で物事を捉え、現実の世界を体験させる絵本。言語表現によって多様な視点で人間の現実を対象化する詩。文学作品は虚構性に真実を見いだすことを目的とするが、自らが「答え」を明確に示そうとはしない。児童文学や小説は、言葉で詳

細に表現し、読者へ意味を的確に伝達しようと試みるが、絵本や詩はむしろ言葉で表現することをできる限り抑制し、沈黙した状況で読者それぞれの解釈に託す姿勢を貫く。自己解釈や読解を回避し「正解」だけを求める高校生の生き方を変えてゆくには、絵本と詩が持つ高等学校教材としての意義を認識し、「詩と絵本を一体化した教材」で想像力や思考力など「生きる力」を育成する多様な読解を目指す必要がある。

今回の研究では、黒田三郎、茨木のり子、吉野弘の詩を高等学校国語の詩教材研究として扱う。この三人の詩人は共通点があり、まず第一に三人の詩が数多く国語教科書に教材として掲載されており高校生に馴染み深い点、第二に日常語を駆使した平明なわかりやすい詩として一般的にも評価が高い点、第三に私達の日常生活を題材に人間が生きることの矛盾を見出し、読者それぞれに生きる意味を問いかけた物語性のある優れた詩を創作している点である。

黒田三郎、茨木のり子、吉野弘の詩は、「いかに生きるか」という人間の根源に関わる問題を、高校生の日常に存在する事柄でわかりやすくしかし奥深く提示して見せる。生きる意味を模索するという高校生には負荷を感じるテーマであっても身近に感じさせる詩風がこの詩人の魅力だと思う。

また、三人はお互いに交流が深く、黒田三郎は吉野弘、茨木のり子を自らの著書で「好きな詩人」として名前を挙げた。また吉野弘は黒田三郎の追悼詩「過ぎ去ってからでないと 故黒田三郎氏に」(詩集『陽を浴びて』19837 花神社)を、同じく茨木のり子は「道しるべ 黒田三郎氏に」(詩集『寸志』19822 花神社)を創作している。

これよりあまり教科書には掲載されていない詩を中心に、三人の詩人の詩が高校教材としてどのように生徒の想像力や思考力を深め、また絵本と関連付けて高等学校の国語が目指す能力の育成に向

けてどのように活用できるか考察してゆく。

(ア) 黒田三郎

詩人・黒田三郎は、詩を創作することは自己の抱える苦しみと向き合うことだと述べている。

僕にとって詩は自分の卑小さ、自分のみじめさを自分自身の心にはつきり焼きつけるために書かれてきたようである。「なぜ私は生きているのか」といった問いは、生きていることに支障がなければ、事々しく問われることないだろう。むしろ「私は生きている」というのにふさわしくない状況においてこそこのような問いも生まれる、と語っている。

(黒田三郎『現代詩入門』1961.5 思潮社/所収 『黒田三郎著作集2』「評論・エッセイ」1989.5 思想社)

戦後派の詩人は、戦争を体験してこれまでの価値観が根底から崩壊する中新たに生きる意味を求めて詩を創作してきた、というのが一般的な印象である。黒田三郎も戦後詩壇に登場したが、平明な言葉を用いたわかりやすい表現で、戦後の新しい日本に戸惑いながら生きる人間の姿や戦争の記憶が薄れゆく社会に生きる一般庶民の内面を鮮明に描写した。詩を読むことに縁がなかった読者にも、黒田の作品は人間の多くが見ているようでも実際に意識にはのぼらない現実を再認識させる。黒田の詩は多岐的・客観的視点で社会を捉える批評の役目を十分に果たしている。道徳としてではなく、様々な立場に立って批評できる幅広い視野と想像力の育成につながるものが出来る詩を数多く創作した。

日常生活のような簡潔さでありながら、物語の語り手のような口調で穏やかに、しかし鋭く現代社会が生み出した矛盾を他者に寄り添った視点で表現する。一見すると矛盾など存在しないかのように

思われる対象を読者の生き方を再考させる媒体に一変させる。

詩集『死後の世界』(1979.2 昭森社)より

病人たち

退院する日五人部屋では僕が最年少だった
隣の寝たきり老人は八十五歳

個室からこの部屋に越してきた僕に

「旦那さん 七十幾つだね」ときいた

むかしの老人は七十五歳

救急車で運ばれて来た義足の老人が七十八歳

いまひとり篤職の六十歳の老人

僅か一月半同室しただけだった

ちよっとした拍子に老人たちの過去が

ぼろざれみたいにぶら下がっているのが

ちらりと見えた

十日目毎の会計日六十歳の篤職は

「あんた いくら払ったかい」と

きまつて大声で僕にきいた

国民健康保険の僕は三割自己負担だった

何でいいのか二三回目によつとわかったが、

「おれは金を払っているんだぞ」と

他の老人たちに誇示するためだった

他の老人たちはすべて医療費は無料

しかし ただはただでも

一日も早く退院したがるひともいたが

帰るにも帰れぬひともいた

こんな老人社会にもむづかしい政治があつて
 バナナを一本もらったりやつたり
 窓をあけるあけないで冷たい戦争があつたり
 便所に行つた隙にかけ口をきいたり
 ひと月もするとそれが窮屈で窮屈で
 散歩と称しては外に出た
 外来患者のいない時間には
 無人の待合室に坐つていた

退院してからやがて一年
 僕はまだ毎日病院に通つて

待合室に坐っているが

ついぞ五人部屋をのぞいたことがない

八十五歳の老人も八十六歳になつたらうが

見舞客の判別もつかぬこの老人を除いて

その外の老人はもうとつくにいない

見たこともない僕の知らぬ病人がいるだけだ

日本人の日常的な光景である「病院」に「政治」を感受する人は少ないだろつ。医療費の有無で優位の序列が生じることなど意識にものぼらない。医療や福祉に関して「高齢化社会」「医療費の増大」など直接的に体験する以前の情報として知っている人間が、実際には全くの傍観者であり未知であつた、という真実を描写する。詩でありながら一話完結の物語性を帯びたオープンエンドの結末で読者に余韻を与える。詩を読み終えて自己の立ち位置を振り返り、自分であれば現実世界をどのように進むか模索させる人間のドラマを詩世界に展開させる。小説で扱つような題材を詩で表現し、語り手の一方的な叙述ではなく語り手と読み手がお互いに対話できる距離ま

で近づける。

日常生活に取材して詩を書くということも必ずしも日常生活そのものの反映ということではない。何かを創り出す、産み出すという創造行為はとりも直さず現状に満足しない、現状批判のあらわれである。その重点がどこにあるのかという点で、政治と直結した詩もあれば、やすらぎや希望の詩も生れる。

日常生活に取材してと言つが、われわれの日常生活に何が欠如しているか、むしろ空虚感を埋めようとするところから生れてくる詩が多いのである。

(黒田三郎『死と死の間』1979.3 花神社ノ所収 『黒田三郎著作集2』

「評論・エッセイ」1989.5 思想社)

現代社会の事実を通してその社会の一員として生きる人間の苦悩や奥深さを、喩えば戯曲で役者が語りかけるように、そして観客が役者の演技を鑑賞するように、そして役者・観客を含めた舞台すべを遠隔から鑑賞するよつな視点で詩世界に表現し続けたのである。しかも、あまりに平凡で日常的な光景に感じ取る人間の矛盾が読む者へ一層強く響く。自分の弱さであり、普通人間は他人に決して漏らさつとはしない心境を黒田は詩の中で読者に問いかけるように語る。戦争体験から独自の深い人間観を持ち、自己の苦悩を客観的に捉えた表現は詩を読む経験の少ない高校生にも共感を呼ぶだろつ。

(イ) 茨木のり子

代表作「私が一番きれいだったとき」が国語教科書の定番として高校生にも馴染みのある詩人・茨木のり子。女性であることを発想の一つの起点として、社会性が意識されるテーマを平明な言葉で表現し、時には碎けた悪戯気のある明朗な語りかけて多くの読者を魅

きつめた。普段の会話のような語調と、爽快で美しい日常語で紡ぎ出す茨木のり子の詩を、彼女自身が水内喜久雄との対談で「これまで詩はモノローグが多かったと思いました。だからダイアローグが大切と。対話です」（水内喜久雄「詩に誘われて」「茨木のり子を訪ねて」1966年 あゆみ出版）と語った。詩を一人称視点の独白体とするのではなく、他者と対話することで自己内面を相対化する三人称視点の詩を目指したといえる。黒田三郎は、茨木のり子の詩に「問いかげの単刀直入さ、そして描かれた風景の親しみぶかく、リアルな感じ」（『現代詩入門』前掲）を受けとり、彼女の詩が「作者を勇気づける何物か」を生み出していると評価した。詩を創作する詩人の苦悩と同様に、現代の若者は日常生活に空虚感や喪失感を抱き、生きることに悩むことが多い。茨木のり子の詩は、悩める多くの若者の心を解放する「子守唄」や「応援歌」である。

詩集『見えない配達夫』（1959年 飯塚書店）より

友あり 近方よりきたる

友あり 近方よりきたる

まことに困ったことになった

ワインは雀の涙ほどしかないし

すてきなお菓子もゆうべでおしまい

果物をもぎに走る果樹園もつしるに控えてはいず

多忙にて

この部屋もつつすら埃がたまっている

まあ落ちついて 落ちついて

ひとの顔さえ見れば御馳走の心配をする

なぞは田舎風というものだ

いえ 田舎風などいってはいけない

その日暮らしの根の浅さを不意に襲われた

これは単なる狼狽である

この時古風な絵のように

私の頭に浮かんで来た戸棚の中の桜桃の皿

ああ助かった

あれは遠方の友より送られた

つやかな桜の木の実

一つ一つ含みながら

せめて言葉のシャンペンの栓を抜こう

シャンペンとはどんなお酒か知らないが

勢のいいことはほほたしか

明日までにどうしてもしなければならぬ

仕事なんで そんなに沢山あるもんじゃない

ほとほと人の家の扉を叩き

訪ねてきてくれたころの方が大切だ

沸騰するおしゃべりに酔っぱらい

ざくざくと撒き散らそう宝石のように結晶した話を

人の悪口は悪口らしく

凄惨に ずたずたに やってやれ

女ともだちのふるえる怒りはマッチの火伝いにもらつことにしよう

このひととき「光る話」を充滿させるために

飾りを筆ね 飾りを筆ね

わが魂らしきものよ！

近方の友は

痛みと恥を隠さぬことによつて

斬新なルポをさりげなく残してゆく

わたくしもまた

そしらぬ顔で べたりと貼りたい 彼女の心に
 忘れられない話を二三つ
 今はもうあまりはやらない旅靴のラベルのように

「友あり 近方よりきたるノまことに困ったことになった」という一節は、論語を典拠とした「友あり 遠方よりきたるノまた説しからずや」とユーマア溢れる呟きで、近くの友人の急な訪問に困惑する日常生活の一面を茶目つ気と悪戯っぽい言葉でより現実的に描いた。「人の悪口は悪口らしく／凄惨に ずたずたに やってやれ」と腕白で乱暴な言葉つかいが一層友人との会話が弾んでいる、そのような様子が目に浮かぶ。

少女が少女らしいことばづかいをしているときだけが、少女の真実を語ると限りはしない。乱暴な男の子のことばを真似てみたときに案外本心がちらっと影を見せるかもしれないのである。

(黒田三郎「現代詩入門『茨木のり子の技術』」前掲)

茨木は、詩人としての自分に「人間の弱さや弱点を隠さなかつた言葉は、おおむね忘れがたいし、こちらの胸にしみとある。このことは、既に子供のころから感づいていて、だから、さらけだす必要もないが、しかし、自分の弱さを隠すな」とずいぶん自身に言いきかせてきた」（『言の葉さやけ』1975、11 花神社ノ所収 『茨木のり子集 言の葉2』2002、9 筑摩書房）と述べた。

過去には戯曲も書いていた茨木のり子は、劇で役者を演じるように、時には日常の仮面を被った自分ではない別の自分を演じ、舞台上で観客の視線に晒されるように他者へ自分を開く大切さを詩で表現した。生きるためには自分ではない自分をことばで演出することが新しい自分に発見につながる可能性を秘めている、というメッセージ

ジを高校生は受けとることが出来るであろう。

(ウ) 吉野弘

吉野弘は、資本主義の社会構造や労働が生み出す人間の自己疎外をテーマとした詩を数多く創作した。詩集『消息』(1957、飯塚書店)で多忙な生活だけにしか安住できない現代人を描き、組織に疎外されながら個人が組織で生きること強いられる矛盾を、日常の出来事を題材として表現した。労働という高校生にとって現実味のあるテーマにおいて鋭く社会批評しながら矛盾を描いている。

詩集『感傷旅行』(1971、7 葡萄社)より

実業

スポンサーの営業会議に出席した。

会議のあとの宴席で

話題が競争会社の倒産に及んだとき

果然

貴公子・若社長が言った。

あと二つや三つ、倒産してもらわないと

これまでの苦勞の甲斐がない

居並んで静かに献酬していた役員や

営業部長の腹の中に

その言葉は

音もなく

したたかに

いしみこんだ、と私は見た。

夜おそく

駅まで私を送ってきた若い営業マンが
頬を紅潮させ乍ら私に語った。

首を賭けるほどスリリングな

営業をしたい

列車が駅を離れ

彼の姿が遠のいて

私の顔・一介のコピーライターの顔が
暗い窓ガラスにうつった。

顔をそむけ

私は思った。

首を賭けたいと言った紅顔の営業マン

敵を倒そうとしていた若社長の白皙の額

実業紀原始人

徒労を知らぬ実業の

逡巡なきエネルギーの化身を。

利を追う真摯な熱情が　そして

かれらとはおよそ異質だった私を。

ほとばしり

飛びかい

殆どそれに淫されてさえた人々の
昼の会議の快樂の中で

けつとく

け遠く

無力感に吹かれていた私

列車は

闇の中を走っていた。

重い眠りへ　ダラリと傾き乍ら

私は自嘲して呟いた

実業に処を得ざるの徒、疲れて眠る、と。

吉野弘は俳句雑誌『野火』37号(「特集・野火への言葉」1972)で、自身の詩作衝動は事件や情緒ではなく言葉によって生まれてくる、と述べている。

「あと二つや三つ、倒産してもらわないと／これまでの苦勞の甲斐がない」「首を賭けるほどスリリングな／営業をしたい」これらの言葉は日常会で何気なく聞いた覚えのあるありふれた表現である。おそらく高校生も近い将来、職場で耳にすることも、また口にする機会もあるだろう。しかし、言葉が時や場所において異質さを持つ時、同じ言葉でありながら営利主義が生み出す強者と必然的に生まれる弱者の存在という資本主義競争社会の矛盾を瞬時に感得させる。労働の理念が孕む自己疎外という現代社会の矛盾を高校生に問題意識として喚起させるにふさわしい詩である。

一つの言葉　一つの現象のなかに含まれている、あるいは別のもの、それに　気づいたとき、ことばは鋭くめざめ、同時に、私たちの意識もめざめるわけです。

吉野弘 『現代詩入門』(2007 青土社)

労働は人間が生きてゆくために回避できない矛盾である。個人と

して一時的に社会を拒絶しても、永続的に社会や組織と関わりを持たず生きることは不可能だという矛盾。同時に、吉野は誠実さや良心、慈愛など人間が理想とすることにさえ矛盾が生じることも事実として捉え詩の題材とした。高校生にとって社会の矛盾した現実や人間があるがままに生きる姿を受容することは困難である。しかし吉野は、自己確立の過程で詩を読み、「思想が身につくことによつて、それ以前は視野に入らなかつた色々の現象が見えてくる。つまり経験にひるがりとふかさが出来てくる。」(『詩とプロバガンダ』『現代詩文庫12 吉野弘詩集』1988 思潮社)と述べている。

「同じような境遇にいる人たちに訴えたくて、人に手紙を出すみたいな形で書く」(『読売新聞』「読売文学賞受賞者をたずねて」1971.2.5) 詩は、ありふれた日常に潜む受容しがい現実を受容する人間の成長と生きることの矛盾に真理を発見する大切さを高校生に伝えてくれることだろう。

(3) 詩と絵本の一体化教材 〳絵本

幼児・児童向きと言われる絵本を高校生の視点で詳細に読解し、生徒個人の多様な解釈を引き出す教材として現代のコンテクストと相対させた作品分析と詩の解釈の方向性を提示する。詩と絵本を一体化して生きる意味を解釈する学習の導入として、まず『つみきのいえ』(2008.10 白泉社)を教材とする。世界中の映画祭で二十冠に輝いた短編アニメーション『つみきのいえ』を、作者である加藤久仁生(監督)、平田研也(脚本)の二人が絵本として描き下ろした作品である。

『つみきのいえ』以降は、文章表現も重視し、絵本の物語の展開も読解の対象として読解のポイントと鑑賞の視点を示しながら絵本と詩を一体化した教材の在り方を研究する。ここでの教材は一例に過ぎないが、生徒各自の鑑賞と読解に基づき、想像力と思考力を刺

激し、今後の国語学習における応用力を育成したいと考える。そして文学作品の虚構世界を客観的に批評し、主体的に解釈する方法を通して生徒が自らの力で今後の人生において学ぶ意味・生きる意味を具体的に見出す動機付けとしたい。

(ア) 世界が認めた絵本の魅力 〳多様化する価値観を越えて
この作品はセリフのないアニメーションだけの短編として出展され、全世界から高く評価された。言語を壁を超越し、アニメーションだけの作品が多様な価値観を持つ世界の人々に共感を与えたことは、文章を絵本鑑賞の対象外とした場合でも、優れた絵本の魅力は世界共通であることを示す根拠となる。生徒それぞれが絵本の意味を解釈しながら、一方でどのような描写が世界の人々の共感を生み、全世界で受け容れられるに至ったか、国際理解の視点で絵本を捉える機会にもなる。

『つみきのいえ』(白泉社 2008.10)

絵・加藤久仁生 文・平田研也



- ・第八十一回アメリカアカデミー賞 短編アニメーション部門受賞
- ・2008年フランス・アヌシー国際アニメーション映画祭
クリスタル賞（最高賞）・こども審査員賞受賞
- ・2008年度第十二回文化庁メディア大賞アニメーション部門大賞

【ストーリー】

海の水位が年々上がり水没してしまった町。そこに暮らす老人は、新しい家をつみきのように水没した家の上へ上へと建て、この土地に暮らし続けてきた。ある冬の日、水没した家の上にまた家を建てる作業中、大工道具を誤って海底へ落とししてしまう。道具を探すために老人自らが海に潜り、工具を三つ下の家で発見する。そこは、老人が以前妻を亡くした悲しみに沈んだ家だった。老人はこれまでの人生を回想しながら更に下へ下へと潜ってゆく。春を迎え、新しく建てた家に住む老人は、家の壁に咲く一輪のタンポポを見て、うれしそうに微笑む。

【読解のポイント】

絵の描写に見られる特徴はどのようなものか。

絵本の舞台はどのような時代背景や社会状況が考えられるか。

絵本の原作である短編アニメーション作品が世界で高く評価されたのはなぜか。

【作品分析】

絵本の舞台は、世界は、実際に水没の危機に晒されている島々が世界に存在する現実とリンクしている。地球の環境破壊へ警告を発するメッセージ性が国際的に高く評価された要因の一つと考える。ある地域に住む住民を見て、私たちが利便性に疑問を感じたとしても、その土地に住む人々は簡単にそこを離れようとはしない。合理

的価値観で計ることができない人間の生活する場所、生まれ育った故郷に対する思いの奥深さを描いている。先祖代々受け継がれた円還的時間の流れ（生命の連鎖）が、生きることへ新たな意義を問い直す。海底へ沈んだ家に人生の思い出を呼び起こしながら海底を下へ「遡る」縦軸の時流と変化する自然環境の変化と人間、家族や仲間など人間同士の繋がりを意識させる横軸を駆使した手法がこの絵本の特徴的である。

物語の鑑賞を通して見えてくるテーマに沿って、黒田三郎・茨木のり子・吉野弘の詩を読み、私たちの実生活に照らし合わせてより深く読解を試みる。

〈詩三編〉 〈対立する価値観と現実を認識する〉

人間個人の価値観の差が、物事に対する認識の仕方や行動の違いとなって現れる。しかし現在の世界は、特定の思想・価値観で善悪や優劣を判断する極論傾向を強めている。次の詩三編は、「主観／客観」「絶対／相対」「理想／現実」「未来／過去」など、詩の表現の中に対立するさまざまな概念を読み取り、目の前の現実を幅広い視野で捉えることを目的として挙げた。

黒田三郎 詩集『失われた墓碑銘』（1956 昭森社）より

傍観者の出発

どこか遠くの方から見ていたい

感動している自分を

感動して我を忘れて飛んでゆく自分を
どこか遠くの方から未未を見ていたい

息を切らしてしまっではいけない
よそ見をしてはいけない

心ひそかにそう念じながら

どこか遠くの方から見ていたい

ああいじつにあおい

その遠くの空の彼方へ

今はそれだけが私の仕事だ

荒々しく私は私を投げつける

紋白蝶のようにかると行ってしまうようにと

眼をどじながら私は私を投げつける

足許に落ちて高雅な陶器のように砕けないようにと

【鑑賞の視点】

『つみきのいえ』に一人で住む老人は、自分の人生を静かに振り返る。物語は過去の自分を見ているが、黒田三郎の詩は未来の自分を離れたところから想像して見ている。自分の内面や自分の周囲のことを一人称の視点ではなく、三人称の冷めた視点で「どこか遠くの方から見ていたい」と突き放して物事を見つめることが、むしろ本質や真理を捉えることにつながるのでは、という問いかけである。

茨木のり子 詩集『見えない配達夫』（1959年 飯塚書店）より

ぎらりと光るダイヤのような日

短い生涯

とてもとても短い生涯

六十年か七十年の

お百姓はどれほど田植えをするのだらう

コックはパイをどれ位焼くのだらう

教師は同じことをどれ位しゃべるのだらう

子供たちは地球の住人になるために

文法や算数や魚の生態なんかを

しこたまつめこまれる

それから品種の改良や

りふじんな権力との闘いや

不正な裁判の攻撃や

泣きたいような雑用や

ばかな戦争の後始末をして

研究や精進や結婚などがあつて

小さな赤ん坊が生れたりすると

考えたりもつと違った自分になりたい

欲望などはもはや警沢品になってしまう

世界に別れを告げる日に

ひとは一生をふりかえって

じぶんが本当に生きた日が

あまりにすくなかったことに驚くのだらう

指折り数えるほどしかない

その日々の中の一つには

恋人との最初の一瞥の

するとい閃光などもまじっているのだらう

するとい閃光などもまじっているのだらう

するとい閃光などもまじっているのだらう

するとい閃光などもまじっているのだらう

するとい閃光などもまじっているのだらう

本当に生きた日 人によって
たしかに違う

きらりと光るダイヤのような日は
銃殺の朝であつたり

アトリエの夜であつたり

果樹園のまひるであつたり

未明のスクラムであつたりするのだ

【鑑賞の視点】

ありふれた日常の光景には、様々な人間の生きた証や残像が残っている。それが海底に沈んだ思い出の家であつても、「りふじんな権力との闘いやノ不正な裁判の攻撃」であつても、人間が生きるには不条理を受け容れる覚悟がある。「きらりと光るダイヤのよつな日」が「銃殺の朝」という実際に起きてはならない出来事を虚構で比的に表現し、どんなことでも現実には、世界のどこかで、誰かに起りうる人間の矛盾した事実を強調する。茨木のり子は、「隠されている深い意味の『啓示』を感じてきた時、それを詩と私は感じる」（茨木のり子集 言の葉1 2002.8 筑摩書房）と述べた。「本当に生きた日 人によって/たしかに違う」という事実、つまり生きる意味は見えない深い場所があり、人によつても違つことが人間の真理であるようだ。

吉野弘 詩集『10ワットの太陽』（1964.12 思想社）より

アジア・アフリカ

東京工業大学学友会主催・第六回アジア学生技術会議のために

犯された資源と、栽培された貧民と

かちとつた独立とを、共に抱いて漂つ

アジア・アフリカ

いわば創世記の……

その中で、いちはやく

技術屋の卵たちが

新世界精錬を話し合っている。

ぼくらはもう古い技術屋ではありませんよ。技術は単に、自然と人間の間に介在する概念ではなく、人間と人間とを結合した分離する人間くさい概念です。
ぼくらは良き結合を試みたい。

かれらはこう言い

殆ど、詩を語るのだった。

【鑑賞の視点】

『つみきのいえ』が地球温暖化に被害を受ける小さな島々を舞台としているならば、科学は他の地域へ移住する利便性を根拠を挙げて正当化するかもしれない。「技術屋の卵たち」が語る「詩」は言葉が現実と乖離した未知なるものを情報として「既知」だと自認した表面的な良心である。若さゆえか、理想に燃え、自分の生き方に疑問を抱かない自信に満ちた言葉は、現実と乖離した表面的な言葉とであることに決して気付かない。

科学万能の価値観に一種の戦慄さえ感じさせる。技術が生み出す「栽培された貧民」が「勝ち取った独立」の影に存在する「犯された資源」の実態。科学技術の生み出す人間疎外の矛盾を国際的視野

で批判的に捉える視点が問われる題材であろう。

(イ) 近代化が生み出した社会　　矛盾する人間の現実

三人の盗賊と一部の富裕層が支配する社会との対比を通して、孤児を生み出す社会の矛盾や暴力性を読み取ることができると感じる。想像力がはたして今の高校生に芽生えているのだろうか。人間が生きていくことは逆説に満ち、その逆説に真実がある。一冊の絵本に描かれた、人間が持つ矛盾がリアルに投射された虚構の世界から、人間社会の矛盾する事実を解釈する思考力が育っているのだろうか。

『すてきな三にんぐみ』(アメリカ 偕成社 1969.12)

作 トミー・アンゲラー 訳 今江 祥智



【ストーリー】

三人の盗賊が孤児救済に世間を駆け回る物語。盗賊が狙う対象は富裕層の財産に限定され、奪った宝飾品を蓄えてきた。ある時、襲った馬車に乗せられていた孤児の少女に、蓄財の目的を訊ねられ、自

分たちでも理解していなかったことに気付く。そこで三人の盗賊は、各地から「さびしく、かなしく、くらいきもちで、くらしているすてこやみなし」を集め、奪った財宝で購入した城で一緒に過ごし始める。この噂は国中に広がり、多くの孤児が城へ預けられる(捨てられる)ようになった。

時は流れ、お城の周辺には大人成長した子どもたちの家が建ち並び、一つの村となった。村には育ての親である三人の盗賊を象ったモニュメントが建てられた。

【読解のポイント】

「さんにんぐみ」が盗賊になったのはなぜか。

絵本のなか「さんにんぐみ」の描き方の特徴はどのようなものか。絵本の舞台はどのような時代背景や社会状況が考えられるか。

【作品分析】

三人の盗賊は富裕な貴族ばかりを襲うが、その目的は明確にされていない。孤児の少女に指摘された財宝の使いみちが全く不明であったという点からも、自分達の贅沢や富への欲望とは異なった目的であったと推測される。盗賊は、「さびしく、かなしく、くらいきもちで、くらしている、すてこや、みなし」を「どっさり」と集めに集めた。それだけこの国には孤児が数多く存在し、またそのような社会を支配層の貴族は生み出した。おそらく盗賊は子ども頃、孤児であったのではないか。孤児を生み出す社会にした大人への不信感が募り、孤児であった「さんにんぐみ」は盗賊へと変わった。一つの城に孤児たちと一緒に暮らしているという噂が広がり、城の孤児たちは増え続ける。この国は三人の孤児が盗賊となった現在でも、様々な事情で親が子育てを放棄しまわなければならない状況にあるのだろうか。子どもを手放す親は、最後の愛情として、子どもの幸せ

な未来のため、盗賊に託したと考えられる。貧富の格差が大きかった前近代の時代に、親子が共倒れにならないよう子どもだけでも生き延びる手段を探り、最終的に「さんにくぐみ」の城に預けたのではないか。多くの孤児たちは大人へと成長し、結婚して家族をつくり、貴族社会と離れた地域に新しい社会を形成する。

活力に満ちた社会には、子どもたちの存在と健やかな成長の糧となる環境が不可欠である。しかし、現代は子育ての困難な社会構造だといわれるが、親が子育てのわずらわしさから逃れるように育児を放棄したり、ストレスのはげ口として虐待をしたりと、子どもが明るく、元気に過ごす場所を失っているケースが目立っている大人の刹那的快楽主義による少子化、育児放棄とは物語の舞台設定と質が異なるが、現代社会の衰退の危機を辛辣に風刺して描写しているようにも思える。

また、「すてきな三にんぐみ」の黒一色の表情には、彼らの人生の影が描かれているようだ。孤児の少女を大事に抱いて隠れ家へ向かう盗賊だけに見られる穏やかな表情は、孤児として同じ境遇への同情と慈愛に満ちている。おそらく三人の意識の中には「盗賊」「悪」という認識はなかったはずだ。生きるために「盗賊」という一部の人間の判断基準では「悪」とされている道を選択肢として選んだだけで、孤児であった人間が、生きるためという極限状態では選択に善悪に基準は関係しない、という現実を決して虚構の世界だけで起りうることはない。人

盗みや暴力は現実世界において肯定されるべきことではないが、神話や童話、絵本においては残酷な暴力や盗みの場面が数多く描かれている。盗賊は一般的に反社会的存在として認識されているが、物語では権力者と対比してしばしば善良な存在として描かれるケースがある。また盗賊に限らず、一般的に評価が低い職業が一般庶民以上に良識を備えた存在としても描かれることもある。神話や伝説

の世界で「トリックスター」と呼ばれるもので、文明そのものに対する異質さを特徴として表現されている。

文化人類学者・ポール・ラディンは、トリックスターは道化師、悪戯者として破壊性、反社会性を帯びているが、その強い生命力から新しい秩序の発見や創造へと導く存在でもある、と述べている。

（「トリックスター」ポール・ラディン／皆河宗一訳・カール・ケルニー／高橋英夫訳・Gユング／河合隼雄訳（2011年）晶文社）常識の枠を超越した存在としてトリックスターを描けば、児童、生徒は当然その人物に魅力を感じるといふ特徴をこの作品は備えている。

ものごとをすべて「二項対立」で言い切ることは難しい。虚構の世界で人間の真実を知り、自分の生きる「答え」を見出す、その経験が現実の世界で直面する矛盾を乗り越え、自分らしいより心豊かな生き方を選択する。虚構世界での破壊性が現実世界での創造性を生む、という逆説を可能にする。これが絵本の魅力であり、まさに詩を創作したり鑑賞したりする意義と一致する。

すぐれた詩の背後には大きな沈黙があります。すぐれた詩のすぐれているところは、読者にこの大きな沈黙を感じさせ、読者自身にも沈黙を共有させるところにあると思います。

（黒田三郎「詩の作り方」前掲）

絵本には、言葉で表現しない絵だけの世界、沈黙がある。社会の矛盾をリアルに描写した絵に、読者はしばしば沈黙してしまう。詩の鑑賞と同様に、言葉を超越した世界を解釈する思考力と想像力の意味を探る作業である。

（詩三編） く矛盾するもう一人の自分く

人間が生み出したモノは、ある時は社会を進歩させるが、ある時

は人間を疎外へと導く。生産性への意識が過剰になり、破壊への警戒を怠った歪みは、環境破壊や社会構造の崩壊などあらゆる場所に顕在化する。特に危機感を抱かせるのは、未来を担う子どもを育てる基盤の崩壊、大人の自己疎外、つまり人間が生きる意味の喪失である。詩を通して、現代の貨幣経済や自由競争社会の厳然たる現実を直視することを目的として次の詩三編を挙げる。

茨木 のり子 詩集『対話』1955:二 不知火社)より

子どもたち

子どもたちの視るものはいつも断片

それだけではなんの意味もなさない断片

たとえ視られても

おとなたちは安心している

なんにもわかりはしないさ あれだけじゃ

しかし

それら一つ一つの出会いは

すばらしく新鮮なので

子どもたちは永く記憶にとどめている

よろこびであったもの 驚いたもの

神秘的なもの 醜いものなどを

青春が嵐のようにとつとつおそってくる

子どもたちはなぎ倒されながら

ふいにすべての記憶を紡ぎはじめる

かれらはかれらのゴブラン織りを織りはじめる

その時に

父や母 教師や祖国などが

海蛇や毒草 こわれた魂 ゆがんだ顔の

イメージで ちいさくかたどられるとしたら

それはやはり哀しいことではないのか

おとなたちにとって

ゆめゆめ油断のならないのは

なによりもまず まわりを走ることもち

今はお菓子ばかりをねらいにかかっている

この栗鼠どもなのである

鑑賞の視点

盗賊となった「さんになぐみ」が、子どもの頃眼にした「大人」の姿とはどのようなものであったのだろうか。一方、孤児たちには悲しみや寂しさをすべて受け止めてくれた盗賊たちがどのような「大人」に映ったのだろうか。子どもの視点から大人の姿を客観的に捉えることはできても、社会を担う一成員となる自覚で自分を自ら大人として扱い、大人となる自分をイメージすることは難しい。学ぶことは、いつまでも子どもの無邪気さに浸ることなく、いずれ訪れる大人の世界へ成長した自分を想像する力を伸ばし、未来への道筋を具現化する力とすることが目的である。

吉野弘 詩集『幻・方法』(1959:5 飯塚書店)より

何を作った

労働者は何を作った。

何でも

何でもさ。

資本家の頭に浮かんだものなら

何でもさ。

資本家は何を作った。

何でも

何でもさ。

たくさんの毒

たくさんの薬

儲かるものなら何でもさ。

労働者は何を作った。

資本家の頭を掠めたものなら

何でもさ。

やせて くだびれて 反抗して。

やせて くだびれて 協力して。

労働者は何を作った。

資本家の頭に宿ったイメージなら

何でもさ。

資本家は何を作った。

商品 商品 商品さ。

それから

資本家の頭には浮かばない

暗い労働者 人間のかけら。

労働者だって恋をした。

子供を作った。

けど

子供をすぐに売り出した。

自分とそっくり同じに仕立てて

孫も曾孫も可哀相に順繰りに商品さ。

労働者の眼はかすんで

その眼に

どんな未来が見えたのだろう。

労働者は何を作った。

何にも

何にも作りゃしない。

こわした

自分を

人間を

資本家の尻馬に乗って

こわしてきた。

目茶苦茶に。

労働者の頭の中に

人間は浮かばない。

こわしてきたのだ

資本家と一緒に。

長い時間をかけて

目茶苦茶に。

労働者は何を作った。

いや

労働者は何を作る？

これからまずと

資本家の思いつきに合わせて

自分を作ってゆく？

自分をこわしてゆく？

鑑賞の視点

孤児を生み出す社会、その社会を作り出した一部の支配者とそれに従属する市民たち。近代化した産業社会で、資本家は意図的に悪を生み出そうとはしないだろうが、「資本家の思いつき」が無意識に悪を生み、蔓延し、社会に根付いてしまう。貧富の差は拡大し、労働者は資本家の指示に従うだけで「労働者の頭の中に／人間は浮かばない。／こわしてきたのだ／資本家と一緒に。／長い時間をかけて／目茶苦茶に。」つまり、主体性を発揮する機会さえ与えられない。

社会の悪を生み出すのは果たして何なのか。傍観者ではなく、社会の一員として現実を批評する明確な根拠と論理性を磨き、すべての人々が幸せを実感できる社会の実現に向けた幅広い視野の下地を養ってほしい。「資本家の頭には浮かばない／暗い労働者／人間のかから」を想像する力である。

黒田三郎 詩集『失われた墓碑銘』（1955.6 昭森社）より

深夜に

深夜に電話がかかってくる

もしもし

どなたですか

どなた

遠い所にいる私

どうしても私を眠らしてくれない私

遠い所にいる無数の私

どうしても眠らしてくれない無数の私

そのひとりはケチンポである

そのひとりはホラ吹きである

そのひとりは偽善者である

そのひとりはメソメソ屋である

遠い所にいる無数の私

どうしても私を眠らしてくれない無数の私

もしもし

切っ飛ばせ

切っ飛ばせ切っ飛ばせ

遠い所でひとりの私が追いかけてられる

遠い所でひとりの私が悲鳴を上げて

遠い所でひとりの私が少女を欺している

遠い所でひとりの私が

深夜に電話がかかってくる

もしもし

切っ飛ばせ切っ飛ばせ切っ飛ばせ

もしもし

鑑賞の視点

意識では悪と理解しても無意識に悪を選択せざるを得ない状況に追い込まれる人間心理をわれわれは理解できない。また、理解しようとしてもしない。仮に自分が悪を選択したとしても、決して一つだけの要因ではなく、複雑に絡み合った心情を自分で明確に説明はできないだろう。思春期に誰もが自分ではない「遠い所にいる無数の私」/どうしても私を眠らしてくれない無数の私」が自分を動かすという体験をする。世の中には、外的世界の基準で動くことは出来ても、内的世界での対話が不十分なために主体的に自分を動かせない人間が増えてきた。自分の生き方の「答え」や「意味」を外的世界に依存するのは、本当の自分や弱い自分と対話することで直面する既存の自己の解体を恐れているからかもしれない。自分の弱さと向き合うことも成長の第一歩である。

(ウ) 「幸福」の意味 く表層の現実と深層の事実

「幸福」の概念が明確でない現代では、二人の幼い兄弟が幸福を探し求めて旅をする『青い鳥』(モリス・メーテルリンク作 1908 フランス)のような虚構世界の物語が現実世界でも実際に起きている。この作品は、欠点だと思いついて入っていることを視点の転換で長所へと考え方を变化させるために、他者の存在、しかも自分とは全く異なる他者の存在が必要であることをメッセージのひとつとしている。しかし、様々な視点で物事を捉えることが幸福へつながる、という表面的な幸福論に終始せず、高校生として生きるうえでの「幸福」の意味をもっと深く考えさせるためにこの絵本を研究する。

『はっぴいさん』(偕成社 2003.9) 絵・文 荒井良二



【ストーリー】

「はっぴいさん」は困ったことや願い事を何でも聞き、そして山の上の大きな石の上に時々現れるという。

なんでもあわててしまう「わたくし」はあわてなくなるようにと、願うために「はっぴいさん」に会いに行き、その途中で二人は出会った。現れない「はっぴいさん」を待ちながら、次第に二人はお互いに胸の内を語り始める。「のろろ」は「丁寧」、「せかせか」は「一生懸命」と評価され、自分の長所だと感じる事が出来るようになった二人は、結局「はっぴいさん」は現れなかったが、太陽を見ているうちに、「はっぴいさん」に会えたように思い、山を降りる。

【読解のポイント】

少年と少女が「のろのろ」「せかせか」した自分の性格を短所だともったのはなぜか。

絵本の描き方の特徴や疑問点はどのようなものか。

「はっぴいさん」の正体はなにか。

【作品分析】

『はっぴいさん』という名称から、「幸福」の意味を問う物語である。絵本に登場する少年と少女、二人はそれぞれが自分の短所を変える方法を知りたいと思っているが、自分の短所だと思っていることは、幼い子どもが自ら気がついたことだろうか、という疑問が生じる。幼い子どもが自分の性格を直したい、と願うにはまだ経験が浅く、実感のないままに短所だと認識してしまっているのではないだろうか。自我に目覚める以前の時期、最初に出会った大人（親、兄弟などの親族）に指摘され、無意識に自分の性格を短所だと思い込んでいただけかもしれない。個人の価値観で物事のすべてを判断し、他者の考えや行動を短所だと決めつけ、その改善を一方的に求める姿勢は多様な生き方を認めない唯一絶対の世界観の現れでもある。『はっぴいさん』というタイトルでありながら破壊された街や至る所を走る戦車や血痕らしきものが数多く描かれていることから、戦争や紛争が発生した地域が物語の舞台であることが予想できる。価値観の画一化が現在世界の各地で紛争が頻発している原因の一つにもなっていると考えられる。

二人の少年と少女は「はっぴいさん」に会いに行く途中で、互いの存在はほとんど無視して、自分の願いを胸に山頂を目指す。山頂でも石の両端に座り、自分の願いをただ祈り続ける。子どもにはそもそも他者が存在する意味を概念として認識できていないことが伺える。しかし降り出した雨のために、ようやく二人は自分の願

い事を相手に話す機会を得る。他者との出会いが自分の視野の拡がりへと導いてゆく瞬間、太陽が輝きを増す。多様な価値観を受容することで訪れる幸福感の享受へと物語は展開してゆく。自我の目覚めによる自己達成感が他者を配慮する余裕を生み、自分の幸福とともに他者の幸福を願う心理的特性の充足が図られるという理想的な成長過程へと進む。ありのままの自分を受け入れることが、それまで他者の存在など意識できなかった子ども二人にたくさんの願い事をさせる。それは自分のことだけでない、多くの人々の幸福を祈ったのである。このような物語を現実離れしたおとぎ話の世界として蔑視した人間が、現実世界では自己の幸福感（自己実現）を喪失して争いを生んだ現実には枚挙がない。いじめや虐待などはその最たる例である。

石は決して動くことはなく、どんな時にもある一定の場所に存在する。沈黙し、自分からは人間に「答え」を与えない。太陽は、悪だと批判される世界にも、善だと評価される世界にも、平等に昇り、また沈む。すべての命に光を注ぎ続ける。石や太陽は人間の価値判断を超越して存在する。だから人間は神話の世界で太陽や石を神として崇拜した。神話が現代の絵本に生きている根拠である。

多様化する価値観に混沌とする世界で、恒久の平和を維持することは現代が背負ったグローバルな課題でもある。一市民が戦争中に「幸福」を願うにはただ平和の到来を祈ることしかない無力さも伴い、ただ漠然と自分の心に「幸福」がある、という観念的思想に依存しがちである。しかし、「幸福」を求めるさまざまな過程に意味を見出す物語として読解することが解釈の幅を広げることへつながると考える。現代の日本社会が平和を願っても、実際の国際紛争地域からは地理的に離れ、当事者としての認識は希薄になりやすいが、世界各地で起きている国際紛争を解決する手段をより現実模索することが虚構の世界を通してどれだけ可能になるか、想像力が問わ

れる。

〈詩三編〉 画一化した基準の陥穽

「正しい」基準は、時代の変遷と共に変化する。「正さ」の普遍的絶対的基準は存在しない。これは人間にとって困難な認識である。頑なに自分の基準を絶対とする態度の人間は数多く社会に存在している。画一化した基準の価値観に拘泥し、社会に蔓延する「理想」「正義」といった言葉の表層的美しさや「建前」に惑わされて、表面的現象だけを事実として捉えてしまう人間の真実と世界の現状。「正しい」とされる基準を自ら見つめ直すことは、高校生にとって真実を見抜くために必要な思考力であり、想像力である、との観点から次の詩三編を挙げる。

吉野弘 詩集『10ワットの太陽』(前掲)より

比喩の太陽

彼が私に言いました。

——この写真が一番良い

これを一席にしよう

あかるくて

人に希望を与える

それに……

ひとに希望を与えたいと

ぼくは常々思っている

彼が希望を持って居ようとは！

私はほんとに驚いて

彼にたずねました

——それは素晴らしい

そして……

どんな希望があなたの中に？

おや めぐりの悪い

という顔をして

彼は私に言いました

——それはもう答えずみです

ぼくはひとに希望を与えたい

それがぼくの希望

ひとに希望を与えたいという希望

ぼくの希望

でも……

私が言いました。

——ひとに与えたいと仰る希望の中味が

どんなか知りたいんです

つまりあなたの思想が

——中味ですって？ 思想ですって？

希望は即ち思想でしょう

太陽には すべてを照らしたいという

希望がある それが太陽の思想です

おかげでわれわれは生き 月や星は

輝く そして 太陽はいくつあっても

いいのです

ああ 比喩の太陽よ

彼が

10ワットの太陽

懐中電灯のような太陽でも

他人は

月や星のように

寒々と輝く義務がある

鑑賞の視点

世の中には、良心が人を傷つけ、慈愛が人を墮落させるという矛盾した現実がある。与える者の崇高な理想や思想だけが語られ、与えられる者の現実的な許容範囲を超えてしまつ事実をよく目にする。一方的な価値判断は他者を逃げ場のない窮地に追い込むことだつてある。自分の理想を実現したがる人間に限って、相手の気持ちを知らずともせず、「せっかくなやっつたのに」という。相手の何かを変えようとする以前に、「他人はノ月や星のようにノ寒々と輝く義務がある」こと、他者が変わろうとする意志が存在することが忘れ去られている。善意の根底には自己の価値観を一方的に押し付けて満足し、他者の価値観を否定してしまつてているが多分にあることに気がつかないのである。

黒田三郎 詩集『流血』(1980.5 思想社)より

よか世

中学生の息子が

旅行へゆく費用をせがむと

余分な金の無い言いわけに

「よか世が来たら

どこへでもおいでよ」と

笑いながら母は言った

その悲しくやさしい顔を

いまも僕はわすれない

それから四十年近くたつた

九十歳近い母はいまも

ふるさとの町で

つましく我慢強く暮らしている

あの戦争の日々

息子たちすべてを戦地へおくり

激しい空襲下のふるさに

母はいた

いまは何もかもすべてが

昔話になってしまったが

しかし

それから

どんな「よか世」が来たことが

このインフレーションの日々

世の中をつましく我慢強い

何千何万という母が

もつと「よか世が来たら」と

同じことはをくりかえしていることが

鑑賞の視点

戦車が描かれた『はつぴいさん』の舞台は戦地であるから、二人のたくさんの願いの一つに「平和」な世の中の実現があったであろう。戦争を体験をした世代の人々は「よか世」を願って戦後の悲惨な状況に耐えてきた。どんな時代でも、人々はこれからもっとよい世の中になつてほしいと願う。特に子を持つ親たちは子どもたちの未来が幸福であることを強く願うだろう。「よか世」といわれる現代の日本は、人間の自己充実感が欠如し、他者に依存することではか自我の確立ができない世の中となつた。何が「よか世」であるのか、今の時代に生きる人間が導き出すすぐには正解のわからない問題である。しかし幸福な「よか世」の実現は親の願い、親としての義務、そして子どもの当然の権利であり、若い世代のこれからの課題として認識しなければならない。

茨木のり子 詩集『対話』(前掲)より

内部からくさる桃

単調なくらしに耐えること

雨だれのように単調な……

恋人どうしのキスを

こころして成熟させること

一生を賭けても食へ飽きない

おいしい南の果実のように

禿鷹の闘争心を見えないものに挑むこと

つねにつねにしりもちをつきながら

ひとびとは

怒りの火薬をしめらせてはならない
まことに自己の名において立つ日のために

ひとびとは盗まなければならない

恒星と恒星の間に光る友情の秘伝を

ひとびとは探索しなければならない

山師のように 執拗に

埋没されてあるものを

ひとりだけにだけふさわしく用意された

生の意味を

それらはたぶん

おそろしいものを含んでいるだろう

酩酊の銃を取るよりはるかに!

耐えきれず人は攫む

價金をつかむように

むなくしく流通するものを攫む

内部からいつもくさってくる桃 平和

日々に失格し

日々に脱落する悪たれによって

世界は

壊滅の夢にさらされてやまない

鑑賞の視点

生きる意味を自己決定する強さを追い求めながら、それでも人間は他人の価値観に翻弄され苦悩しながら生きている。闘争心や粘り強さ、探究心と向上心、自我を脅かす存在に耐え続けて自我は自覚める。多くの人間は自己を見失い、時代の価値観に流されて生きる。「耐えきれず人は攫む/贖金をつかむように/むなしく流通するものを攫む」ように生きてゆく。

困難から眼を背けるか、現実を直視して立ち向かうか、自分の確固たる生きることに対する価値観で正しく判断できる能力を養いたい。表面的な美しさに装飾された物事の裏側には複雑な人間の心理が隠され、現実世界の人間の真実を知るにも人格的成長がなければならぬ。「内部からいつもくさってくる桃」のように、表層的な「平和」の根底に争いの火種は常にくすぶっていることを想像する力が、いち早く現実の変化に気づき、行動へと移させるのである。

(エ) 生きることを模索する、「死が怖くない」という心理
現代は「死」を忌まわしい回避すべき存在として扱われるケースが多く、特に児童の教材として慎重さが求められている。しかし「死」をめぐる問題が社会でも頻繁に議論されており、決して虚構世界だけの事象として認識するべきではない。

この絵本で象徴的なのは、「死ぬことが怖くない」という表現であり、この心理は、私達の常識ではとても理解が及ばない。人間は必ず死を迎えるという現実を受け入れて、生きることの矛盾を乗り越えるには自分ならばどうするか。人間にとって最も未知である「死」は虚構世界でしか学ぶことはできない。その答えを導き出す想像力を伸ばす様々な解釈が可能になる表現として捉えたい。

『100万回生きたねこ』(講談社 1977.10)

作・絵 佐野洋子



【ストーリー】

100万回も死んで、100万回も生きたねこがいた。王様、船乗り、手品使い、泥棒、おばあさん、女の子など100万人がそのねこを愛し、100万人がそのねこの死に泣いた。あるとき、ねこは誰のねこでもない、のらねこになった。自分自身が一番好きなねこは、めすねこたちの求愛に全く応えようとはしないが、たった一匹だけ自分のことを見向きもしない白く美しいねこに魅せられる。愛されることはあっても愛した経験のないねこは白ねこに自ら求愛し二匹は結婚する。やがて子どもが生まれ、自分よりも大切な家族を持つが、ある日、愛する白ねこが突然死を迎える。100万回死んでも悲しくなかったねこは、愛する者を失って初めて涙を流す。

【読解のポイント】

ねこが死ぬことに恐怖を抱いていないのはなぜか。
ねこが100万回死んだことを自慢するのはなぜか。
ねこが二度と生き返らなかったのはなぜか。

【作品分析】

初版から三十年以上を経つた現在でも子ども達の頃に読んだ最も印象深い絵本として絶大な人気を誇る。一般的には生死、生まれ変わりなど生命に関する内容や他者を愛する素晴らしさを描いた絵本として高く評価されているが、いくつかの疑問が指摘できる。

まず一つは、猫の死がすべてが非業の死であったことである。猫は飼い主に対して愛情はなく、飼い主のモノとして存在したに過ぎない。猫の死の原因は飼い主にあり、戦争や犯罪の犠牲、玩具として扱われた末の不慮の事故など幸せな死であったとは思えない描かれ方である。飼い主は猫の死を悲しむが、死にゆく猫が飼い主の涙を見ることも、猫が泣くことも必然的にありえない。死を悼み涙するのはいつも残された者である。愛されることが悲劇を生むという事実。一方的な愛情が愛される者を予期せぬ事態へ誘うという真理を表現していると解釈したい。

いずれの死も悲惨な死であるため飼い主の悲しみを一層増幅させるが、猫に寄り添った視点で解釈すれば、主体的に生きることを許さなかった飼い主に窮屈さを感じ、愛情の意味も知らずにまともに生きていたはずだ。悲惨な死を繰り返しながら何度も生まれ変わわり、その度に迎える死への恐怖を全く感じていない点は様々な解釈が可能となる。愛する者が誰であれ、真に愛情の対象となりえない自己喪失感が、死を恐れずむしろ破滅へと突き進ませる要因ともなる、

という現代の社会風潮を思い起こさせる。
また、とらねこの男性視点だけでなく、白ねこの女性視点から

も作品の実体を多様な側面から把握させることができる。のらねことして生まれ変わったことで、主体的に生き、これまで一方的に押し付けられるだけだった愛情を自分の意志で自由に受け入れることができるようになった。「100万回死んだ」ことが自慢の自己愛に溺れるとらねこには、多くのめすねこが求愛するなかで、唯一愛情を示さない城ねこはどのように映ったのであろうか。無関心な態度のしるねこに魅了されるとらねこは、白ねこのどこに魅力を感じたのか。ミステリアスな白ねこのキャラクターは、絵本の想像力と思考力を掻きたてる教材として効果が大きい期待できる。

「死」を題材として思考を深める機会を絵本というやや虚構性の大きい世界で想像し、より多く体感する習慣が必要だ。「100万回生きたねこ」は「100万回死んだねこ」でもある。「死」が「生」へと転換され、タイトルに「生きた」が表現されていることはとても印象的である。

〈詩三編〉 自分の生き方が輝くために

「生と死は表裏一体」と言われても高校生に実感がわかないのは当然だ。直接的な死の体験は不可能であるから、間接的な死を体験する目的で、「100万回生きたねこ」を教材としたが、詩では「生きること」を焦点化して読解させることを目的とした。次の詩三編には「死」を意識させる言葉はあまり使われていない。(黒田三郎『劇場の隅で』「美しい死を遂げたあとにも」のみ) 死や生きる意味を問うために人間は神話や物語を生み出したと前述したが、高校生が自らの力で生を輝かせることや生きる意味を模索する教材として挙げた。

黒田三郎 詩集『ある日ある時』(1988年 昭森社)より

劇場の隅で

今は観客席にしまりかえって
そつと坐っているあなたにだつて
ひよつとしたら

すばらしい役がふられているのかもれない
人生という目に見えない大きな舞台の上で

あなたの人生の舞台では

いつもその主人公はあなた

愛と憎しみの涙を流すのもあなた

裏切るのもあなたなら

裏切られるのもあなた

たとえそのとき

あなたが満員電車にゆられていようと

主人公はあなた

たとえそのとき

あなたが事務机にむかつていようと

主人公はあなた

あなたの心のなかの

誰も知らない秘密の舞台

そこでひそかに愛し

ひそかに憎み

ありとあらゆる可能性をあなたは生きる

美しい死を遂げたあとにも

一瞬の後には

よみがえり

誰もいないからの

観客席に向かつて立つ

鑑賞の視点

他者に従属した生き方と自分の意志に忠実な主体的な生き方。人生を舞台にたとえ、どちらを選択しても自分自身が主人公として人生を演じる。「見えない力」運命」で脚本が存在しても、演じる役者で格段に演出効果は変化する。「美しい死を遂げたあとにも一瞬の後にはよみがえり」、何度でも再生して現実世界を生きる。自分の人生に与えられた課題を克服するまで何度でも形を変えて課題が与えられる。解決困難な課題に直面すると自分の意志とは無関係だと思ひ、運命として捉えることは出来ない。置かれた境遇に対し、自己憐憫の情が思考を支配する。それでも人生に果敢に臨む主体的意志は維持し続けたい。変化は成長の証であり「あらゆる可能性」を実現する原動力である。

茨木のり子 詩集『鎮魂歌』(前掲)より

汲む

Y・Yに

大人になるといふのは

すれっからしになることだと

思い込んでいた少女のころ

立居振舞の美しい

発音の正確な

素敵な女のひとと会いました
そのひとは私の背のびをみすかしたように
なにげない話に言いました

初々しさが大切な

人に対しても世の中に対しても
人を人とも思わなくなつたとき

墮落が始まるのね 墮ちてゆくのを

隠そうとしても 隠せなくなつた人を何人も見ました

私はどきんとし

そして深く悟りました

大人になつてもどきまぎしたつていいんだな

ぎこちない挨拶 醜く赤くなる

失語症 なめらかでないしぐさ

子供の悪戯にさえ傷ついてしまう

頼りない生牡蠣のような感受性

それらを鍛える必要は少しもなかったのだな

年老いても咲きたての薔薇 柔らかく

外にむかつてひらかれるこそ難しい

あらゆる仕事

すべてのいい仕事の核には

震える弱いアンテナが隠されている きっと……

わたくしもかつてのあの人と同じくらいの年になりました

たちかえり

今もときどきその意味を

ひっそり汲むことがあるのです

鑑賞の視点

自然体でいることと背伸びしたくなる見栄っ張りな自分の心境、大人となつても複雑に絡み合つた人間心理の矛盾の一場面が描写される。得体の知れない自己の感受性を「生牡蠣のような」という直喩でグロテスクに表現する。自分でも理解できない内面を日常語の固有名詞で喩えてイメージを拡大させる。詩の比喩敵効果にも注目したい。

黒田三郎は茨木のり子の詩を「幻滅や失望、虚無感に落ち込もうとする前に、自分を跳躍台に乗せる役目」を果たし、「読者の気持ちを支え高く弾きとばす」と評価した。本当の自分を知るために、日常の仮面を付け替えて違つ誰かになることも必要。しかし仮面の下の素顔を他者に晒すことも大事。二分法では説明できない矛盾する人間の生き方が詩の虚構世界を通して自己へ投影される。「今もときどきその意味を／ひっそり汲むことがあるのです」と、自然体という詩人の語りかけであり、読者が生きることにおいて「子守唄」や「応援歌」になりうる詩でもある。

吉野弘 詩集『叙景』(1979:11 青土社)より

白い表紙

ジーンズの、ゆるいスカートに

おなかのふくらみを包んで

おかつぱ頭の若い女のひとがよんでいる

白い表紙の大きな本。

電車の中

私の前の座席に腰を下ろして。

白い表紙は
本のカバーの裏返し。

やがて

彼女はまどろみ

手から離れた本は

開かれたまま、膝の上。

さかさに見える絵は

出産育児の手引き。

母親になる準備を

彼女に急がせているのは

おなかの中の小さな命令 愛らしい威嚇

彼女はその声に従う。

声の望みを理解するための知識をむさぼる。

おそらく

それまでのどんな試験のときよりも

真摯な集中。

疲れているらしく

彼女はまどろみ

膝の上に開かれた本は

時折、風にめくられている。

鑑賞の視点

「死」が自己の意志と無関係であるように、「生」も自己の意志とは無関係である。「死」が残された者へ悲しみを与えれば、「生」は待つ者へ「喜び」を与える。子どもの誕生を心待ちにする母親は、

「おなかの中の小さな命令 愛らしい威嚇」に従って新しい「生」へ関わる義務を全うしようとする。自己の生命に真摯であれば、「生」や「死」の当事者となって生きることの矛盾に満ちた苦悩を体験することもあるが、「生」への希望や喜びを自己の感覚として受容することが出来るようになる。生命の誕生に伴う親の義務と責任。人間が生きていることは常に両義性を持つ。人間の主体的な生き方は「死」に対し恐怖や不安の感情も生じさせるが、同時に「生」への健全な感覚の芽生えにもつながってゆくであろう。

(オ) 絵本とは詩である 〈語り手の告白〉

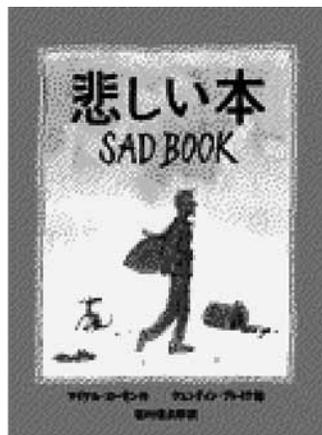
悲しみのもたらす人間の精神的な不条理は、「私」の行動にも不条理の影を落とし、現在の社会全体が悲しみを抱え、生きる意味を自らの力で見出す困難な状況であるという現実を突きつけている。

吉野弘は『現代詩入門』(前掲)で「わからないことを時間をかけて、はっきりさせてゆく、その作業が書くということだ」と述べる。「生きようとする人間的な意志によっておのずと姿を現わす」(吉野弘)矛盾は、人間の意志では回避できない悲しみを自らの力で受容することでしか超越することはできない。そのとき詩は矛盾を超越する可能性を秘めている。「必然に逆らい、越えようとし、そのことよって矛盾が実現していること、そこに詩の美しさがある」という言葉は「悲しい本」が絵本でありながら「詩」であるもつとも大きな根拠となる。死や悲しみを直接的に表現し、人間が生きるその本質に対する問いと対峙させる絵本として大きな価値がある。

『悲しい本』(アメリカ 2004.12 あかね書房)

作 マイケル・ローゼン

絵 クエンティン・ブレイク 訳 谷川俊太郎



【ストーリー】

息子を亡くし、信頼できる相談相手の母親も今は亡く、深い悲しみに沈む孤独な「私」。なんとかして悲しみから逃れようと苦悩する「私」。消えうせてしまいたい絶望の中、「私」の目の前に広がる様々な風景と胸をよぎる楽しかった思い出。「私」は「大好きな誕生日」を思い出しながらロウソクの灯をただ一人じっと見つめている。

【読解のポイント】

「私」が悲しいのはなぜか。

「私」が悲しみを乗り越えるために何をしようとしているか。

「ロウソク」は何を意味しているか。

【作品分析】

一人称視点の心境小説のような手法であるが、視点の捉え方を変えて、多様な解釈を可能にしたい。「私」に寄り添った読解であれば、愛する息子を失った悲しみを現実として受け入れることができ「私」の物語となる。三人称視点で読解すると、悲しみに沈む

孤独な人間を第三者的に観察する物語となり、悲しみを世の中にあるふれた光景の一つとして虚構の世界を通して客観的に捉えさせる。現実的には、突然降りかかる悲しみの訪れに人間は無力感を抱かずにはいられない。「なにもかも誰かに話したいときがある」。一方で、「誰にも、なにも話したくないときもある」。矛盾する人間心理。絵本であり「詩」を感じる表現である。「ひとりて考えたい。私の悲しみだから。ほかの誰のものでもないのだから」と「私」は語る。「悲しみ」を相対的に捉え、むしろ論観して自己の主体性で「悲しみ」を受容するしかないことに気付くが、そのことが一層の悲壮感や寂寥感呼び起こす。

様々な方法で悲しみを忘れようとしても刹那的で根底から悲しみを超越することは出来ない。人間はすべて表面上幸せを装うが、心には悲しみを抱え生きている。むしろ人間が快楽や刺激を求めて生きるのは悲しみの深さに機縁する。愛する者を失った悲しみであったはずが、いつの間にか人間の理解を超えた正体不明の存在であることを知る。「変わってゆく自分」に生きる悲しみを感じる瞬間がこれまで以上に増えてゆく。そしてその状況は人間が生きてゆく限り誰にでも起こりうることを強く訴えかける。

悲しみに打ちひしがれ「消えうせてしまいたい」絶望にある「私」は「書くこと」に救いを求める。人間が「詩人」になる瞬間である。

私は書く

悲しみはそこ

深くて暗い

ベットの下の

からっぽのそこ

悲しみはそこ

高くてくらくらすする

空のように

頭の上

深くて暗いと

こわくて行けない

高くてくらくらすすると

息が苦しい

吉野弘は「現代詩入門」（前掲）で、詩を予感させ、詩作を促すものを、「矛盾がその本質をなしているような事物・観念」であると述べた。それは「人間が何事かをなそうとするとき、そうはさせまいとする力の働くのを感じ」、「それを打ち破ろうとするとき、そこに露呈されてくる矛盾、その矛盾の一方の加担者なったときに、いやおうなく感得される矛盾」だと説明している。つまり人間が生きていることそれ自身が矛盾であり、矛盾があるから人間は生きているという逆説が成り立ち、「詩」を読むことが生きる意味を考える手段となる。

「私」が回想の中で思い出した誕生日のロウソクは何を意味するのか、また寂しさで見つめるロウソクの灯に人間は何を思うのか、多くのメッセージを読者それぞれが受け取ることができるだろう。

〈詩三編〉　く日常の光景から詩が生まれるく

「悲しい本」は詩人・谷川俊太郎が訳し、至る箇所に詩的表現を読むことができた。それは日常の平凡な光景や情性的に繰り返される毎日に、突然の変化が生じて自制する心を失う傷ついた人間の姿

と発せられた言葉である。

詩は傷ついた人間のことはだということである。「何故詩を書くのか」という問いに答えるのは、傷ついた人間である。

（黒田三郎「現代詩入門」前掲）

過剰なほど他者に怯え、社会に対して無関心を装う人間。矛盾する自分の心に操られ、言葉にできない感情をもてあます人間。他者の間に不気味な共感と安堵を抱く人間。このように、日常に確かに存在する傷ついた人間の姿を、詩は虚構の中に真実味を持たせて表現する。心の闇に苦悩する人間が生きる真理を読んだ詩を挙げる。

黒田三郎 詩集『もつと高く』（1964）思想社）より

日常茶飯

たまたまそのときそこに
居合わせたというだけのこと
ひとりの人間が死ぬ
ふたりの人間が死ぬ
いや それは
ひとりやふたりだけのことは
ないかも知れない

デパートの風防の破片が頭上に落ちてくる

オート三輪が歩道に乗り上げる

毎日の新聞をよくよんでこらんよ

眠っている間に古いガス管からガスが洩れる

横丁から走り出た犬が突然咬みつく

いや それは

ガスや犬くらいのことではないかもしれぬ

ひとりの実直な中年の会社員が

毎朝きまった時間に家を出る

きまったように公園のかどを曲がり電車に乗り

きまった時間に会社の自分の椅子に坐る

何か変わったことの起る気配は何もない

給料が突然三倍になるなんて

そんなことは金輪際起りつこないのだ

一杯の茶をすすりながら

給料日まであと何日と胸算用をし

きまったように一枚の新聞紙をひろげる

世のなかのすべてのひとがよむように

彼をそこをよむ

「たまたまそのときそこに

居合わせたというだけのことで」死んだとのことを

他人の不幸を

いや 事件のニュースを

さまざまなニュースを

原爆をつんだ飛行機がイギリスの基地からとび立ち

四十六時中とんでいるというニュースを

彼はよみ それからきょうの仕事

きのう止めた処からきのうと同じように始めるのだ

鑑賞の視点

情報化社会では情報として与えられた悲しみをわかったものとし

てすませてしまふ。悲しい事件に対し、心ではどこか自分には無関係だと傍観者の領域に位置していて、真から理解していない状況が余りに多い。黒田三郎は「内部と外部の世界」(前掲)で、詩は「二重の障害を越えて、お互いの生活感情を結び合わせるもの」であり、「潜在する共感を掘りあてること」が真にわかるのだと述べた。社会への無関心な生き方をする人間が、自分自身への突然の不幸の訪れに感情を制御不能にして自分を見失わせる。氾濫する膨大な情報に慣らされ、表面的な言葉だけで理解したつもりでいる評論家のような事後的態度を自戒する姿勢の大切を痛感する詩である。不幸な事件や現代社会の生きにくさを批判して、他者ばかりを批判する風潮から脱却し、自己を客観的に、冷静に批評することもこれからの社会には必要だ。戦後日本は戦前の政治や思想などすべてを批判の対象として糾弾した。その時代を生きた黒田の詩だからこそ、時代を越えても共通するテーマとして現代に鑑賞する価値を持ち続けていることが伺える。

茨木のり子 詩集『現代詩文庫20 茨木のり子詩集』

(1983 思想社)より

言いたくない言葉

心の底に 強い圧力をかけて

蔵つてある言葉

声に出せば

文字に記せば

たちまち色褪せるだらう

それらによって

私が立つところのもの
それによって

私が生かしめられているところの思念

人に伝えようとするは

あまりに平凡すぎて

けつして伝わってはゆかないだろう

その人の気圧のなかでしか

生きられぬ言葉もある

一本の蠟燭のように

熾烈に燃える 燃えつきろ

自分勝手に

誰の眼にもふれずに

鑑賞の視点

茨木のり子は「詩論に変えて」と副題を銘打ってこの詩を創作した。彼女は著書で（『言の葉さやけ』1975.11 花神社ノ所収 『茨

木のり子集 言の葉2』2002.9 筑摩書房）で美しい言葉の条件を三つ挙げた。

まず第一に「その人なりの発見を持った言葉は美しい。どんな些細なことであっても。」第二に「正確な言葉は美しい。正確さへのせめて近似値に近づこうとしている言葉は美しい。研究論文であっても、描写であっても、認識であっても。」そして第三に「人間の言葉を言葉たらしめる「一番大切な素」と強調した「体験の組織化」した言葉である。

他者に自分の悲しみの理由は説明できても、どれほど悲しいか、程度を説明することは困難である。しかし「悲しみ」を自己体験に

組み込み、言葉にできない心情が存在し、それでも言葉にしなければ乗り越えられない現実から生まれた言葉に美しさがある。自己を蠟燭の炎に仮託した『悲しい本』と同様に、「一本の蠟燭のように／熾烈に燃える燃えつきろ／自分勝手に／誰の眼にもふれずに」と、言葉で自らの内面吐露ができないもどかしさ語る語り手。読者の最大限の想像力を發揮して蠟燭の炎に意味を見出して、言葉にならない沈黙の読解に挑んでほしい。

吉野弘 詩集『北入曾』（1977.1 青土社）より

SCANDAL

スキャンダルは

キャンドルだと私は思う。

人間は

このキャンドルの灯で しばし

闇のおちごちを見せてもらうのだと私は思う。

みんな

自分の住んでいる闇を

自分の抱えている闇を

見たがっているのだが

自分ではスキャンダルを灯すことができないので

他人の灯したスキャンダルで

しみじみ

ひとさまの闇を覗くのだと私は思う。

自分の闇とおなじだわな、と

納得するのだと私は思う。

スキャンダルは

キャンドルだとは思う。

鑑賞の視点

自分で考える過程を経ずして、世の中で起こった事件のすべてを知っているように錯覚する現代社会の陥穽。本質を見ようとはしない興味本位の短絡な解釈が他者の醜聞（スキャンダル）に「自分の闇とおなじだわナ、と」異常な執着を抱かせる。自己の闇を嫌悪し眼を背けようとしながらも、どこか自己と他者の闇に共感して安堵感を抱く人間の本性を浮き彫りにしている。月夜の暗い闇のように、月光が輝けば影も一層濃くなる現実。眼前の現象だけに注目し存在しているはずの裏側に真実が語られず沈黙する言葉には耳を傾けようとはしない。キャンドル（蠟燭）にともる灯は自分を照らしその影を映し出すが、人間は表面上の明るさを望みながら、実際は表裏一体である自分の影に怯えるのであろう。

萩原朔太郎は詩集『月に吠える（序）』（1972）感情詩社・白鳥社）で月明かりに浮かび上がる自己の影に怯えて吠える犬と「私自分の陰鬱な影」に怯える自己を重ね合わせた。蠟燭の灯は影に怯える人間に何をもたらずのか、他の二詩とは全く異なる隠喩表現である。

（4）詩の鑑賞における今後の留意点

詩の鑑賞に関しては、詩に対する教師の知識不足と生徒のイメージ力頼りの授業方法、詩独特の表現技法に対する生徒の戸惑いと拒絶感、そして定期試験問題に適さない、などこれまでの認識を転換させることが前提となる。根拠のない感想の発表にならないように一定の方向性は示しながら、これまでの解説や評価にとらわれず、絵本が示す意味をそれぞれの感性で感じ取ることを目的とする。生徒の学習は「想像力」「思考力」を伸ばすことに重点を置く。自己

の固定観念から脱却できるよう、高校生では見落としてしまいそうな表現上の些細な違いやストーリーの展開、疑問点などを指導者が提示しながら幅広い自由な解釈を引き出したい。そのため、教師が文学作品の読解における技術と指導方法は絶対に確立しておかなければならない。最後に詩の学習における留意点をまとめる。

日常語の表現の的確さ、重さを知る。

詩は簡潔な一行の中に情緒や感情を込める表現を可能にした。言葉を変化し、詩表現の持つリズムやイメージだけでなく、日常語の持つ重さを知る。

日常語で自己の感情を伝える能力を育てる。

感情の理由は述べられてもその感情自身を日常語で伝えることは困難。その感情を他者に理解させる能力がコミュニケーションを成立させる。自己の深い感情を表現する詩的言語への感覚を磨き、豊かな心情の涵養へと繋げる。

詩的言語を通じて自己の感性的体験をする。

詩的表現によって日常的な自己の言語感覚の揺らぎを体験することが詩の学習と捉える。社会の矛盾した現実問題を通して思考を深める体験をする小説の学習との併用も効果的と考ええる。

補助教材を多く用い、幅広い読解を可能にする。

詩人のいろいろな詩を読み、相違点や多様なイメージを鑑賞する。「主体的な読み」は重視するが、一定方向へのイメージの導きは必要。文化的背景の説明も補足的に実施する。

主題へのこだわりを捨て、詩の全体のリズムやイメージを重視する。

詩における主題だけを重視し、全生徒に共通する主題を模索させる話し合い学習は実施しない。（例：「作者のもつとも思いを込めた一行はどれか」など）

5. おわりに

ある出版社の試験面接で、これまで読書した本の中で、最も印象に残っている本を質問したところ、多くの学生から絵本の名前が挙げられて試験官が戸惑った、という記事を読んだ。子どもが絵本で学んだ「生きる意味」が、大人となっても心に根付いているのである。

黒田三郎は人間の日常を「狭い意味における経験のあまの狭さ」と、広い意味における経験のあまりの広さ、というあまりにも極端な対照の中に、毎日くりかえされている。」と述べ、「起こったこととは何か」と自分で考える過程ぬきに、「何が起こったか」を知らせる、「いわば「未来形であるものを」「現在完了形」で伝える」と指摘した（『内部と外部の世界』前掲）。私たちは、社会で起こった様々な事件を真に事実として知ること、起こった事件の意味や相互関係のすべてを知ることとの断絶に気付かないのだ。

自分の眼で見、自分の耳で聞き、自分自身で感じ、自分自身で考えるということは、言いかえれば、未知の世界に自ら直面することではないか。それは事態の意味を新たに自ら問うことである。わかり切ったこととして経験をこま切れにすましてしまわないことである。

（黒田三郎『内部と外部の世界』前掲）

絵本は年齢を超えて人間の事実と真理の歴史を体験させ、詩は個人では不可能な経験を言葉を媒介に代替経験としての作用を与える。そのような代替経験が自らの生きる上での思考力を発揮させる。

私事であるが、自閉症の小学校三年生の長女に、妻が毎日絵本の読み聞かせを続けている。全く言葉を発することができなかった娘が、絵本の文章から言葉を少しずつ覚え、今では言葉遊びのようにな

会話ができるまでに成長した。ある言葉を耳にすると絵や場面が思い出されるらしく、絵本の物語や文章を口ずさんだり、絵本のフレーズをその場に適用してそのまま使ってみたりして会話が少しずつ成立するようになった。コミュニケーション能力に欠陥がある自閉症児童が、絵本の言葉を通して会話するための語彙数を増やし、また場面に応じてどのように反応し、どのような言葉を発したらよいから学んでゆくことを知った。自閉症や発達障がいを持つ児童は想像力の欠如がコミュニケーションを困難にさせているといわれる。しかし、障がい児が絵本から言葉や考え、人との接し方を学び、少しずつ想像力を培って生きる力としていることを考えると、健常者にとっても虚構世界で培った語彙や想像力、思考力がコミュニケーションを円滑にし、生きることにしてもっと意義深く考えることが可能になるのではないかと考えた。このような私個人の体験が絵本と詩を高等学校の国語教材として研究する動機となった。

これほど多くの詩を読んだのは国語教諭でありながら初めての経験で、詩歌を教材とした授業で質を向上させることができなかつた最大の要因である。今回の研究で、詩歌が短い表現であることを利用して他の作品にも数多く触れる機会を設け、生徒それぞれの想像力によって虚構世界を幅広く解釈し、現実世界で生きる意味を深く認識させることに繋がることを知った。私はこれまで、国語は単に言葉を教えて文章が読めたり書けたりする能力を育てる教科ではなく、人間を育てる教科であるとの自負で授業をしてきたが、改めて「国語」という教科が人間の生きる力を育てるために必要不可欠であると自信を深めたことが最も大きな収穫であった。

今回の研修では、宮崎大学の多くの先生方から私が全く知らなかつた高度な知識や教科指導方法を数多くご指導頂いた。特に菅邦男教授には、詩や文学作品読解の奥深さについてご教授を賜り、学生と同様に虚構世界の読解を通して私自身の言語感覚や想像力、思考力

を伸ばして頂いた。今では詩の世界にすっかり魅了され、もっと多くの詩集を読んで自らの読解の限界に挑戦してみようと思っっている。心より感謝申し上げます。

【主要参考文献】

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領』 (2008.3.28 公示)
 - ・ 文部科学省 『中学校学習指導要領』 (2008.3.28 公示)
 - ・ 文部科学省 『高等学校学習指導要領』 (2009.3.9 公示)
 - ・ 『黒田三郎著作集1』 「全詩集」 思想社 一九八九・二
 - ・ 『黒田三郎著作集2』 「評論・エッセイ」 思想社 一九八九・五
 - ・ 『黒田三郎著作集3』 「評論・エッセイ」 思想社 一九八九・七
 - ・ 『現代の詩人4 黒田三郎』 中央公論社 一九八三・八
 - ・ 黒田三郎 『詩の作り方』 明治書院 一九六九・一
 - ・ 西郷武彦 『文芸・教育全集9』 「文芸の世界 近現代詩」 恒文社 一九九六・一〇
 - ・ 西郷武彦 『文芸・教育全集18』 「文芸学講座 虚構・美・真実」 恒文社 一九九八・七
 - ・ 横谷輝 『児童文学の思想と世界』 啓隆閣出版 一九六九・六
 - ・ 河合隼雄 『神話の心理学』 大和書房 二〇〇六・七
 - ・ 河合隼雄 『影の現象学』 講談社学術文庫 一九八七・十二
 - ・ 今江祥智 『今江祥智の本 第22巻』 理論社 一九八一・一
 - ・ 入沢康夫 『詩にかかわる』 思想社 二〇〇二・六
 - ・ 茨木のり子 『現代詩文庫20 茨木のり子詩集』 思想社 一九六九・三
 - ・ 茨木のり子 『茨木のり子集 言の葉1』 筑摩書房 二〇〇二・九
 - ・ 茨木のり子 『茨木のり子集 言の葉2』 筑摩書房 二〇〇二・十一
 - ・ 吉野弘 『現代詩入門』 青土社 二〇〇七・七
 - ・ 吉野弘 『現代詩文庫12 吉野弘詩集』 思想社 一九六八・八
 - ・ 吉野弘 『現代詩文庫16 続吉野弘詩集』 思想社 一九九四・四
 - ・ 『吉野弘全詩集』 青土社 一九九四・四
 - ・ 『近代詩現代詩必携』 學燈社 一九八八・一〇
 - ・ 水内喜久雄 『詩にさそわれて』 3 あゆみ出版 一九九六・九
 - ・ 小森陽一 『ゆらぎの日本文学』 NHKブックス 一九九八・九
 - ・ 石原千秋・木股知之・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織 『読むための理論 文学―文学―批評』 筑摩書房 一九九一・六
 - ・ 佐藤信夫 『レトリック感覚』 講談社学術文庫 一九九二・六
 - ・ 菅邦男 『初発の感想を生かす詩教育の理論と実践』 教育出版センター 一九九一・四
- (二〇一〇年四月二〇日受理)